主幹・麻生路郎

川柳雜誌

十二月號

昭和四年十二月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌

第六卷 第十二號

川柳雜誌社發行

支部聯合句會

本社吉例の京阪神支部聯合句會を左の通り開催致します。例年此句會から川柳を味ひ始めて上達される方が多いのですから、川柳家は勿論、これから川柳を作ってみやうと思はれる方々の御出席を歡迎致します。

◇時日　十二月四日午後六時（水曜日）

◇場所　大阪市南區日本橋一丁目交又點北の辻東へ入日本橋倶樂部

◇兼題「焙」二句　「賄」二句　庵生路郎選

◇同　庄萬よし選

◇講演　歳末風景　金參拾錢　庵生路郎

◇會費

○出席者全部に投句用箋（百枚綴）一冊進呈

○兼題席題各三光に呈賞（出席者に限る）寄贈副賞品贈呈

主催　道頓堀支部幹事庄萬よし。天滿支部同北山悟郎。濱寺支部同太田朝陽神戸支部同楊井二南。梅田支部同水谷鮎美。螢ヶ池支部同牧田普門。糸屋町支部同川合舟々。加古川支部同水田桐郎。京都支部同桑原京郎。北濱支部同谷村稔。堺支部同友淵貴山守口支部同朝田新水。御旅支部同櫻井圓角

後援　川柳雜誌社

川柳雜誌　第六卷第十二號　目次

光擢抄素描　蛭子省二

現時の柳壇　安井ひろし

少年ひかるの死　松盛琴人

石竹氏の句　阿部閑生

月評（前號）　路郎、紋大、山雨樓、ひろし、琴人

川柳書架　吉田清

表紙（街の冬）　小出檜重

創作

近作　庵生路郎

川柳塔　岩本素人　松丘町二　住田亂耽　淺井冷々子　松盛琴人　岩崎柳路　伊藤綠之助　朝田新水　中島鐵州　安井ひろし　出口雨町　水谷鮎美　酒井駒人　橋本二柳子

○　阿部閑生　西村市公　水田桐郎　松村敏郎　清水光風　池田雪峰　櫻井圓角　若井たけし　島田翠峰　中澤濁水　中見光路　牧田普門　安西杏三　永田里十九

BUILDING

聲　岩本素人

冬一杯の水を呑んで　安川久流美

略語解へ　蛭子省二

鳩その他　福田山雨樓

默殺　松丘町二

松山と路郎師　四國ヶ生

びまな仕事から　伊藤綠之助

自動車　伊藤神山人

一路集

外人　岩本素人

就職　安川久流美

釘　蛭子省二

本社十一月例會　佐々木三福選

茶六氏歡迎會　岩本素人選

各地柳壇　中川めかくし　友淵貴山共選

杭全町MEMO　橋本二柳子記

編輯後記　安井ひろし記

二柳子　路郎生

近作

麻生路郎

A^2のB^2のこ娘の子
肺であることなぜ隠したりするんです
僕は醫者でも藥すべでもありません
施療患者の資格なんぞありがたくないでせう
船に乘るこいふことを早や案じてかゝる
奥さんこ金解禁コント位にやなるでせう
眞面目に聞いて下さい白髪の話です
脚に魅惑爪に魅惑の日が經つよ
詰らぬ本だが讀まぬ本だが
ごつかで飲んで來てのマルクス・エンゲルス
泣きごとは止せ止せごうせ十二月

近作柳樽

路郎選

秋の日が我が横顔に暮れかゝり　大阪　雅幽

首吊るに程よい枝へ名月や　同　同

秋の濱に烏三羽と病む君と　同　同

下駄の齒に秋の日足が追ひすがり　同　同

柳友瑾三氏送別（二句）

居残りになつて「カイランショウ」を食ひ　桑港　神山人

月は一つ西と東で眺めます　同　同

ジャップには空家にしても貸さぬなり　同　同

越して行く先も日本人のあと　同　同

二つ三つ老けて見せるも暮し向き　別府　晃卓

親類の持ち甲斐もなく秋の風　同　同

張板に俺の羽織のやけた色　同　同

熱押して出れば遲刻をとがめられ　同　同

金が出來たか堅い挨拶　大阪　蒼梧樓

蟲の音に誘ひ出されし過去の非よ　同　同

朝顔は日覆にならづ屋根へのび　同　同

アリナレの向ふが支那と思はれず　朝鮮　救命
支那筏長い旅だと小屋も建て　同　同
妻や子へ心にもなき事大主義　同　同
時候見舞ひ得意を逃がすまいとする　大阪　幸泉
罪人に巡査の仕打ちあんまりな　同　同
見つむれば菊の伸びるが見ねぬなり　同　同
緊縮の夜長を寒う居る女將　松山　青帆
只一人だけの女給が風邪をひき　同　同
髭剃つたあごで電筒へ指圖する　同　同
車踏む鼠に似てる日を送り　大阪　一舟
子と子の氣合ふて轉宅見合せる　同　同
改めて主人の手前誘ひに來　堺　平八
掏りらしい刑事らしいが前に立ち　同　同
正しきに生き從順に餓ゑ死なん　同　同
客にまでよく泣く子だと思はれる　神戸　嶺月
本宅は類忌と貼つて下女も留守　同　同
エプロンをきちんと子なき女なり　同　同
留守番に時計のネヂの戻る音　大阪　二竹
逢ふて戻つたか六疊のあほむけ　同　同
死んだ夢見たと女房は笑ふなり　同　同

人並みの強さが欲しい山◑秋　金澤　木偶人
抜けきらぬ稚氣を旦那に見拔かれる　同　同
恰度今花野を通る御こむらひ　同　同
御承知でせうがこ否を云はせぬ氣　神戸　志郎
子の唱歌運動會が近くなり　同　同
貧しさに骨の形の顏になり　同　同
冷め果てた壁でカフエー休んで屠　大阪　天絲
いそ〳〵こ炭つぐ人の炭を見る　同　同
友の死をうまくやつたなこ思ひ　同　同
面白う死ぬ氣がさした話なり　神戸　柳川亭
王の座にましますメロン賣れ殘り　同　同
二次會に舞妓なんぞは邪魔こ云ふ　同　同
立膝が喧嘩しさうな夜の風呂　東京　雨月
叱つてるやうにせつかち娘を口說き　同　同
口笛が吹けて女給は不良じみ　同　同
中學に行かぬ同志で誘ひ合ひ　堺　三絃
大學を出てるからこてこはられ　同　同
銀行でみんな預ける人に見ね　同　同
名も知らぬ花折る秋のピクニック　大阪　卯三
不履行な婚約もあるタイピスト　同　同

二階借り音を殺して釘を打ち　同

嫂に二度目にあへば手が荒れて　京都　一羊

肌ぬぎのたゝない顔が立つも金　同　同

樽柿を見つめて勵む氣を起し　同　同

百日はあまりに長い咳でした　大阪　素萠

お隣の食はずに建てた倉が映ね　同　同

妬くのではないがさ女房兒を泣かせ　同　同

腋の下から母らしく乳　松山　武子

コスモスが堤離れて三四本　同　同

絲をしごけば浮世も皺が寄つて見ね　同　同

取り留もない雑談へ疳をたて　螢ヶ池　湖舟

貧困へ疑獄事件の金の高　同　同

神よ我に厚顔ましさを彼奴程　大阪　しかじ

秋風の命を奉じて立つ女　同　同

修身さ別に先生慴氣をし　松山　閑修軒

子に耻ろいゝ年をしてやきやあがり　同　同

腹立ちは今日の鉋の切れぬこさ　大阪　嘉月

無理をして買つてやつたに喜ばず　同　同

直し屋が會釋してゆく子澤山　尼ヶ崎　虚白

男親呉れるに叱る癖があり　同　同

山肌に喰ひ入つて行く資本主義　大阪　亂調子
重病へ指輪ありたけ指してやり　同　同
わかつてるくゝと母柔らかし　高知　蝸牛
雞が座敷から出る留守を訪ひ　同　同
たゝ今へ返事もされず二階借り　大阪　壽枝女
子のないがよいとも云はれ淋しうて　同　同
死んだ嫁と同じ慳氣な嫁をとり　松山　白梅女
慳氣さすその計畫を嬉しがり　同　同
負ふてまた抱いて病む子へ淋しみぬ　大阪　沐天
信心の珠數へ心をまかさばや　同　同
押賣へ奥から太い聲を添へ　松山　雨眠
押賣は勳八等を箱で見せ　同　同
長患ひ氣分よいのか椽にゐる　大阪　公二
身に痛い話し雜誌へ目を落し　同　同

私は買勳しました實際に

勳二等二十八圓支那で買ひ　京都　青兒
土を掘り此のヅつと下亞米利加よ　同　同
飛乘りへ女車掌は身をかわし　大阪　凡句郎
篠つく雨をやつて來るのも敵討　同　同
柿を取るごこかで誰か咳をする　姫島　觀月

頬杖の姿も秋のものこなり　同

テノールはお經に近い聲を出し　大阪　大黄

坂道を學校戻り押してくれ　同　同

怠けても怠けても日は傾かず　平塚　笑童

雨の日も來て愛してるこを云ふ　同　同

田中總裁の逝去を（一句）

遺言もなく緊縮の秋を逝き　大阪　吐句坊

卷の二をもう讀みたがる新學期　同　同

しつくりこ袷に戀をそゝられて　神戸　卯生

屋根藥の吹き飛ぶへ幼な子を抱き　同　同

二百圓こしらへてから暗く生き　大和　勝二

妻こいふ玩具にあきたペンを持ち　同　同

烏　丸　交　通　巡　査　濡　れ　て　る　る　大阪　豆秋

ステッキが一本欲しい嵐山　同　同

中途から反對されて腹が立ち　奈良　青柿

出戻りは南京蟲のここも言ひ　同　同

解　職　を　躊　躇　す　る　よ　な　後　楯　大阪　喜由

妹　の　十　八　兄　の　眼　に　感　じ　同　同

コホロギへすまぬ氣持の草を引き　兵庫　無鬼

この邊でよいのに菊の延びてゆき　同　同

方針が變り公使の板挟み　大阪　樂鳥

二次會は車の上で年をとり　同　同

僕のこゝぢうでもよいと不平顔　京都　佐顯

夏の足ちよつとはしをり輕うなり　同　豐中　石竹

アルバムにはる淋しさの落ち椿　同　同

横なぎの雨にそむいて豆が生ね　大阪　柳影

何氣なく踏まれて虫の死んでゆき　同　同

思ひ出の家並の中の警察署　京都　愛子

默つてる夫へひとりしやべつてる　同　同

死んでくれたらと思はれるだろ長く病み　大阪　三子平

通帳の即時拂ひは病んでゐる　同　同

盗癖の子供殘して父は逝き　鳥取　一風

足音も輕く就職戻つて來　同　同

洋裝の妹少し喋舌り過ぎ　大阪　青果

嬉しさのことも秘密にして居れず　同　同

改心をしたのに不幸續くなり　松山　文芳

來年を氣遣ふ母を京へ連れ　同　同

お詣りを絶さぬ墓を老妓持ち　大阪　虫二

默禱の眼にまざ〳〵と人の首　同　同

幸不幸脊中合せの裏長屋

吹く泡もしみ〴〵青い草の蟹　島根　キヨシ

秋まつり疊を灰汁でふかんかな　同　同

後ろ手に菊賞めてゐる嫁の父　大阪　桂枝

許されぬ嫁から孫の寫眞が來　同　同

秋風にさらりと文を奪はれて　金澤　好次

受付へ乳のふくれが目立つなり　同　同

重役の考へ金を出す氣なり　大阪　悟空

百圓を割つて財布が小さすぎ　同　同

生活と生活肉親まで妬み　鳥取　耕民

憚らぬ欠伸に家のせまいこと　同　同

明月へ少し病ひの窓を開け　松山　かき松

抜足で來て小姑の早合點　同　同

琴なんぞ習つて姉の嫁きおくれ　金澤　今雨

子の病ひ何時からですと女客　同　同

ひやかしをハタキで散らす古本屋　大阪　汀月

精一ぱい叱言の云へた電話なり　同　同

スタートは死ぬ筈でない繼なりし　長野　柳兒

本名で藝者拘留の記事に載り　同　同

夜逃までしたが今では土に歸し　別子　空山

東京で困つて居ると言つて呉れ　同　同

トマトウを好む子も唯一人きり　松山　紫吻
休職は諦らめてゐた髭を持ち　同　同
散髪屋表へわざと唾をはき　堺　清路
死ぬなんてさすが女の淺墓さ　同　同
留守居番時計にネヂをかけてみる　鳥取　青水
先妻の子の皆甲も妬ましく　同　同
幸運を捕へんとして西東　松山　玄々子
聞くまいとすれど隣の根深節　同　同
人違ひらしい挨拶氣味惡し　堺　幻草
泣き言へ談判すこし弱すぎる　同　同
蟲のよつぽど荒れるなと思ひ　鳥取　湖山
風呂に行く暇をもたない子の寢顔　同　同
人絹を笑ひ木綿へ糊をつけ　兼二浦　花夢
學校は嬉し机が待つてゐる　同　同
あの醫者は何日まで藥飲ますやら　大阪　菊路
一番の違ひで逃げた二千圓　同　同
女事務罷めさゝれた日に雨が降り　神戸　不然
駈落へやう〳〵永い日が暮れる　同　同
不幸にも狂氣となれず酒へ行く　島根　花情
病中吟
つくねんとゐる膝がしら蠅の戀　同　同

口笛を街の彼方へ吹き鳴らす　大阪　ひかる
考へりや丁稚なごもういやになり　同　一騎
父を思へば努力の足らぬ日がつゞき　松山　松葉
友呼べば答へず人の波にゆれ　大阪　孤愁
子を抱かへ腕をのばして駒をおし　道後　計加
人妻になる御土産を稼いでゐる　大阪　憲太
日曜日子供に習字強いてゐる　松山　大樓
さら〳〵と襖に秋の訪づれし　大阪　紫電
享楽の女とせんに淋しすぎ　螢ヶ池　武郎
診察の結果はやはりヒステリー　大阪　沒食子
無花果に腕白さうな手が出合ひ　別子　愛子
梳髪は自働電話で約束し　大阪　英郎
丸焼けになつてゐるのへ冬が來る　吳　光哉
支店長つまらぬ事に意地を持ち　大阪　朝日
夏の寢間網を打たれた五六人　兵庫　香山
破産とは沒交渉に安産し　泉南　鯉友
秋たけて案山子も杖をとり落し　大分　蚊郎
圖案家の看板までがそれらしく　大阪　秋甫
藝術に精進してる貧乏さ　鳥取　のぼる
葬式へ豫後備五人の子が揃ひ　大阪　勇宗

俄雨サクラも手傳ふ香具師の店　兵庫　左腕子

コスモスの伸び初めてから折れてゆき　大阪　愚圓坊

豆腐屋へ店頭一人手を鳴らし　丸龜　柚蘭坊

浮ばれぬこゝまで經驗重ねて來　大阪　八歩

硝子戸に娘横尻見せて行き　別府　豐泉

金一封ひゝの情にはづかしく　大阪　さだを

石垣の捨石すめば潮がくる　今津　魚頭

女でももうよい強く安く產め　大阪　千春

廻り椅子來るなり癖の涕をかみ　兼二浦　如空

生活に追はれて果てが法の道　大阪　靜香

不足とは思へど選手勝ち過ぎる　堺　太路

本當の話をすればさからはず　大阪　白帆

妹の身輕さバンドゆるむなり　島根　專路

裏二階昨夜の騷ぎを乾してゐる　大阪　苦香

劍劇の遊びに子供一寸死に　別府　雨汀

老人の身にあり餘る金にして　大阪　正博

退院を待つて嬉しく洗ひもの　島根　智慧子

引越す先もやつぱり裏長屋　大阪　凸瓢

婉曲にチップをねだる女給老け　豊橋　芙蓉

子を連れて朝の公園淋し過ぎ　大阪　喜天

大欠伸やれ〳〵家が見ゆるなり　名古屋　草石

二日醉そこにゐるのは誰かいな　大阪　格子亭

自分だけ悟り奇行の二つ三つ　平塚　城月

失戀の涙を隱し不自然に笑ふ　大阪　山茶花

曼珠沙華戀を待つ日の雨に褪せ　島根　無帆

硝子屋を連れて子供の詫をしに　大阪　四五磨

朝酒を待つまを冷ゐる話なり　吳　仙人掌

ひまそうな顔で儲ける納經所　大阪　一柳

長二郎の話にふける裁縫所　京都　折草

老ひ給ひしこゝよゝ母のうしろより　豊中　土佐坊

義歯をはめて落付いた顔になり　大阪　麥角

買物の重い片手で戻つて來　神戸　霞城

便宜上重役の子を知つておき　大阪　與詩夫

不自然でない滑稽を子に感じ　神戸　可村

人格を左右するとてモーニング　大阪　夕鐘

月給の額に人物定められ　鳥取　佳水

全快の當座手を合す人ばかり　大阪　衣童子

内嫁になる氣に決めて女教員　石川　柳月坊

俺の欲云へばお前は笑ふだろ　大阪　炭車

相塲闘夫婦喧嘩の種を蒔き　京都　潮多浪

仕入部の今日ひつそりと休むなり　大阪　狂雨

雞の聲よ朝日よさは風よ　尼ヶ崎　健坊

酒だけに負けねばならい男なり　大阪　英賀夫

明日も來いと空はれてアンコ空を見る　兵庫　白水生

いゝ月夜芝生へ卓を持ち出し　松山　雨の子

この苦勞知らずに妻はすねて居る　別府　突如

雨が止み星を見付けた子は叫び　神戸　柳村

栗おこし思ひがけない筋へ破れ　京都　瓢二樓

景品を見てから籤のとこへ行き　中關　一羽

緣談の不調寫眞の愚痴になる　東京　詩化雄

暮しにも戀にも心枯れてゐる　不明　失名

光耀抄素描

蛭子省二

八月特輯號に光耀抄第三回の發表があつた。前二回には卑見をのべたので、遠慮してゐたのであるが、何人も紹介の筆を執られないから、遲れながら、例の漫話的に、短くそして親しく、拜見しなほしてみよう　みさ子孃（十一才）

筍が出きた出きたと雀の子

何んでもお友達にしてしまふ童心、鏡のやうな淸朗な態度からは、雀の鼻びが自然を祝福し、自らもそのパートナーであるかの如く、素直な詩が生れる。子供の作は其儘で味はねばならぬ何等の忖度を許さない。偉大な詩人は一箇の子供であるとも言はれる。正しいアル焦點は知つて置きたい。

マネキンの句は、ボツ〳〵見受ける、そして好いのはないそうだ、ステッキガールの句に就ては、『東北川柳　誌十月號に私は排斥した意見をかいた。それは銀座街上にもスガは存在しないからである　處が餘談であるけれど、先日二柳子氏から南海新聞を貰つた讀むと高野山にスガが居ると云ふのだ、其いかなる者であるかは書かぬ方が、明日のおたのしみとならう、否　こういふ事實に出ツくはした。一人の知己が四ケ月許り入院した、幸に九死に一生を得て、看護婦さんの肩を借り病棟の廊下を歩行のお稽古をするまでになつた、私は直にステッキガールとは此の事だろうと思つたが　マダその洒落を浴びせる迄には弱々しい。やがて新しい夫婦が出來上つた時、世にも目出度いステッキだと、今更らしく眺めた。美人にしては淺黑いが、確かに力になる細君だと慶祝せざるを得なかつた……閑話休題、未だバスケットガールの句をみない、よし江さんの

夏休みショップガールになるもよし

は恐らく、ショップガールの詠まれた、始めであらうが？。案外成績は良好で能率が上ると聞くから、毎休暇に殖ゑる事であらう、其位な世間的實務の經驗はあつて欲しい、そは不良誘惑

に打勝つ度胸にもなる、句としては單に詠まれた丈けで、何物もがない、新題材は題材の餘剩興味に眩惑して、一氣に無頓着に織込むでしまふ、錯覺に陷易い、そこに危險と陷穽がある、氣分の卽興的な感では、兎角事柄にのみ支配されて、至純な庶境、卽ち經驗生活交渉が乏しく、言葉の剌戟にのみ陶醉しすぎるものである。一歩の差で玩具的藝術となる、時事吟に失敗作の多いのも、それである。

公設市場へ女學校出身者ー嫁入する迄のーで店を出して、交互に販賣事務を掌る、といふ記事を新聞でみた。監督は校長であるそうだが　實際知見を弘めるには　簡單な良い組織だと思ふ、買ふ方でも不安かない。壽枝女さんの

一人子をどこへ行くにも父が連れは上五の關係からは　『父はつれ』とあり度い、だから

一人ッ子どこへゆくにも父がつれ

上五が變るべきでなからうか？　聲調の問題で、必ずしも川柳樣式であるといふのみではない、

兄弟はついの絣でさんぽつり

も『ついの絣』といへば、先づ兄弟と判斷がつく、句の上に之れ程の理解はなくてはならぬ、『對の浴衣』で、姉と妹を思はせた作はいくらもある。信子さんの

淋しさは櫛の根にある毛に殘り

『川柳人』一派の表現を示して居ると考へられ、私は暫らく言を挿しはさむを躊躇したい。基調的に言葉を持廻る傾向過多は見逃せない、非常に複雜味がある樣だけれど、

櫛の根の毛に殘る淋しさ

である、十四字詩の方が卒直だといへる　明晰だといへる。吟女さんの

まげ無しが似合ふと云はれ淋しがり

下五をモ少し働かせ度く考へてみたが、今適當な工夫がない、作者にも御再考を願つてみたい。流石は御婦人の作丈けに、マゲナシは近作柳樽にも、まだない。後代考證ものゝ一つであらう。

思ひ出すは櫛卷である。古句に

櫛卷にするのが嫁のくづしそめ

今日此の句をみると、單に嫁の世帶馴れとでもこれ、夫れ丈けでも充分興趣生命はあるけれ共、句の生れた時代の風習を知ると、櫛卷が斷髮怪に流行した事もあつたらしく、そこで嫁の若々しさが一層汲まれて、句の躍動性を見落しならなくなる。當世武野俗談に。『此みなとやお陸は、むすび髮なり、結び髮の上此眞似をして江戸中女の結ぶ事になりけり』とある、歷世女裝考にも。

古語に一兎街に走れば萬戸追之といへれど、識志ある者豈一

兎に狂走せん、物の流行すゝも兎の街を走るが如し、安永の間櫛巻こいふ髪の風流傳廣く、三都におよべり、そのもとは武野俗談に、寶暦中淺草寺内お福茶やに、みなこやお六こて名だいの女ありて、髪も上手にて櫛をさかしまに巻こみて結けり、〃を櫛巻こて世上の女ゆふ事こなれりこあり、明和中祇徳が句に、櫛巻に春の柳や三日の月、又、柳樽三編、櫛巻は嫁の身持のくづし初、これらにて其流行したるをしるべしおのれ此動を作るにつけて　むかしの女風をおもひだすに、二百年前はなににもあれ、一風おこればその風三四十年も變らざりしに、百年以來は十年を不期　五十年來は三年を不待こ、世の流行の推移變遷に因つて、何事も一概に浮華なりこ極めてしまふわけにはゆかぬ、今の如く昔もそうであつたので

いつそのくされ櫛巻で芝居なり　（吉川柳）

櫛巻の内容がわかるこ、上七の意味が深刻こなるゝ近世風俗志に、『櫛巻こ云ふ　むすび形也、江戸文政頃まで專らこれに結ぶ、近年これにむすばず、今世も御殿女中むすびかみの時、必ず櫛巻也、内々のことなれども他の形に結ばず』こある、安永七年江戸板鈴木春信畫繪本貞操草に櫛巻の女七人あり、主人も下女も櫛巻なり、此頃京の繪本にも櫛巻みたれば、三都にはやりしこ見ゆたり。

女の子内へ歸るこ又食べる　愛女

番共の汗へ何か言ひたく通過ぎ　武子

お辭儀許りさせて女の子を育て　吟女

皆女らしい觀察はみゐて居るけれ共　モウこれ丈けでは私共の心底を新らしく醒しては呉れぬ、第一第三句の樣な古川柳樣式に曖着せず工夫して離脱した表現が欲しい、そは本誌の使命こする一運動でもあるこ思ふ。

（附記）双龍子氏の『スポーツこ寫眞班』を讀むでゐたら、『最近大阪本社でも道頓堀で揮へたステッキ娘二名を特ダネ寫眞で賑はせた、兩手で面を伏せた身も心も恥ぢてしやがんだ姿にまでも、執念深くレンズを向けなくてもよさそうなものではないか』こあつたので、私も大毎紙上の寫眞を思ひ出した、これでステッキガールは立派に存在するアカシがついた、樂屋落でない川柳詩の材料に大膽に使つて頂けるわけである。

◇川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋が出來ました。左の價格でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。

◇百枚綴一册　價　金拾參錢（送料共）

▼御申込は本社事務所宛。（一錢切手代用不苦）

現時の柳壇

―柳誌偶感と本誌の使命―

安井ひろし

川柳の雜誌が各地に刊行される事は柳界の盛んなる所以で喜ぶべき現象だと云ふもの　群小柳誌の簇出は柳界大同團結の見地から憂ふべきであるとなすもの　殊に後者に屬する談をなすものが多いやうである。

いま全國に刊行される柳誌を大別してみるに、

Aの柳團は川柳の革新を叫んで、新興川柳誌と呼稱し、神秘主義を高唱し、これにあらざれば將來の川柳にあらずと唱へてをり、

Bの柳團は階級鬪爭の手段として　無産階級意識の闡明に勉め、プロ文學としてのみ川柳は存在すべきだとの見地にあるやうであり、

Cの柳團は傳統の大旗を掲げて、趣味として享樂として川柳を作り、誰にでも解りやすく作り易い誌型として寫生派川柳を社會内に進出せしめようとして居る。これが大衆詩として川柳の使命なるかの如く遵奉して居り、

Dの柳團は古川柳の解剖的研究によつて、歴史的人情風俗史的見卽から川柳を研究し其結果を發表する機關として川柳誌を刊行して居る。

Eの柳團は鄕土的色彩を濃厚にして、ローカルカラーを示す事に主力を置いて居る。これが各地方柳誌の存在する所以のやうである。然らば我『川柳雜誌』は如何なる見地から刊行して居るかについて述べる事とする。

我『川柳雜誌』は生活を通じての思索、感情の川柳詩化を主張して居ると共に、常に時代に一歩先んじ、時代精神をリードすべき見地に立つてゐるのであるが、

顧へつて前述各柳誌の主張とその外的あらはれを社會的にみる時そのあまりにも微力な事を認めないわけにはゆかないので本誌はまづ柳壇そのものを社會的に大なるものとして押し出す

ことを切望し詩壇・歌壇、俳壇に伍して遜色ない程度・或はより以上の内容を具現して、社會的存在を實現したいと念願してゐるのである。これが創刊當初（大正十三年二月）路郎主幹の聲明された『川柳の社會化』『初心者誘導』『研究の發表機關』の三大使命なのである。

本誌の發行組織は同人社友制とはなつてをるが、單に本社同人社友のみの發表機關誌にとゞまるものではなく、前記使命を實現するため、全柳壇の全豹を社會に覗はしめんために我社の主張を述べると共に所謂新興川柳も、所謂傳統川柳も、所謂鄕土川柳も、古川柳の研究にもすべて價値ある・秀れたる作品、評論、研究、のために誌面を解放し、それ等の掲載に吝かならぬものである。卽ち社會に柳壇の全豹を知悉せしめると共に川柳圈の擴大を期して前述の各主張を綜合し、檢討して社會人をして正しい川柳觀賞眼を養はしめんとするに他ならない。從つて本誌が一主張一流派の同人機關誌にあらずして、全柳壇の代表誌として、社會にその存在を示して已に六ケ年を閱した事はあまりにも周知の事實である。

路郎主幹が大正十五年新春句會に於て述べられたる『川柳の商品化』がそこにあるのである。川柳の商品化とは川柳を賣るとか買ふとかいふ營利的目的物たらしめようといふのではない正しい川柳の觀賞が當然の歸結として、川柳の藝術價値に對して社會の支拂ふ對價を指すのである。

よき繪畫や文藝作品が、それに拂はれる當然なる代償を受くると同樣でなければならぬとの謂である。斯る時代の川柳は社會人の缺くべからざる希求によつて生れ來る詩であつて、智能ある人士の續々と川柳創作に從ふ事となるを疑はない。これが『初心者誘導』の精神である。

然しある一集團にのみ通ずる如き川柳・單なる趣味享樂としての川柳は、その時代に於ても尙殘骸を橫へるであらふが、生命的には過去の遺物となり、當然亡ぶべき性質のものとなる事は明かである。

今日資本主義時代に於ても封建思想を謳歌して自己が資本主義時代の統制下にあるを忘れて居る人達。或は將來の社會主義時代に於ても資本主義の迷夢を追ふものと同一の運命を背負ふ性質の者である事論を待たない。

藝術は常に社會文化を指導すべきものであるに關らず、藝術家の無氣力さが、時代の潮流に迎合するために光輝を失ふ結果を來す事を銘記せねばならぬ。

以上『川柳雜誌』が他の同人雜誌と異る使命のもとに發行されて居る事は大略述べ得たと思ふ。世の柳人諸氏よA、B、C、D、E等の主張の大成を援けらるゝと共に、本誌の主張方針に贊し來り合して此大業の成就に協力されん事を望む。（四、一一、八）

月評

【前號】

路紋山ひろし琴人

雨樓太郎

近作柳樽　ひろし提出

書置をしたとて見せる者もなく

湖舟

ひろし……病院に在る作者が死といふものに就て常に思索をして居る其姿が非常に眞面目に表はれて居ると思ふ。書置をして置いても誰に見せ樣と云ふあても無い人生の淋しさがよく出て居る。限りなく痛ましい句である。

琴人……此句を讀んで、句主が病者であるといふ事を知ると先づ、胸が潰れる樣な思ひをする。作者が自己の全部を投げ出さぬと斯うした句は得られないと思ふ。悲哀な句だ。併し此句を切離して一本立として見た時に或はそれ程の感激が得られないかも知れない自暴自棄の結果云ひ放した句と見誤まれる虞れがありはしないかと思ふ。

山雨樓――句主の心持はよく解りますが、川柳はもう少し奥の方に在りはせないかと思ふ。と云ふのは作者が感じて居る淋しさ或は今琴人氏が述べられた自暴自棄、又は厭世觀と云つた樣なものが單なる空想幻影として目の前にちらついて居るといふ程度のものしか意識せられて居らない樣に思ふ。書置と迄思ひ詰めた者の心持はもつと〳〵突詰めた鋭いものが現はされて居なければならない筈だと思ふ。其突詰めた心、鋭い表現が川柳として俟つて居るのだらうと思ふ。要するに斯うした心持の句としては頗る物足りなさを感ずるものである。（此時紋太氏出席）

ひろし……作者は病床にある人であつて、書置といふのは、書置を仕樣といふのではない從つて書置をして自殺をする、といふ樣な突詰めた氣持では無いので、同じ作者の「死んだ事電話で一寸云ふてのけ」の句にある樣に死といふものを非常に手輕に扱つて居る。此病院に於て書置を見て昊れる者さへ無からうと思ふ其還境の淋しさを咏つて居るのである。作者は死に就ては可成りの諦觀を持つて居乍ら尙病氣と戰つて此淋しい人生を生きて行こうとする、其うら淋しさを、斯く表現したのである。

山雨樓……僕は侘しさの心持はよく解ります。其解り過ぎるのが却つて淋しさを淺くして居る恨みがある樣で物足りない。我々が川柳創作の上に於て先づ感激した心持を、如何に表現するかといふことに就ては、さうした解り易い容易さから、今一歩突進めて行かなければならないのだらうと思ふ。川柳は何處迄も表現を忘れてはならないと思ふ。

琴人……山雨樓氏の御説は御尤もだ今云はれた事が川柳を作る上に大變稗益する事だと思ひます。が私の申しましたのは、作者が病人であり、入院中の人であるといふ事を知つて此句を見た時には可成に作者の感激が咏んであると思ふ。だが今申した通り、作者が病人であると云ふ事を知らないで、此句を唯一句だけ見た時に先程いふた凝問を生ずるので、斯ういふものには、何か前書でもあつたらばと、私には思はれます。「病ひと語る」とか云ふ樣な具合に、如何ですか。

山雨樓……前書の御話がありましたが、病人が作つた句だから、其句は病人で無い者で作つた句よりも高價に觀賞されなければならぬ理由は無いと思ふ。唯病人として体驗を經たが爲めに、より強い感激と鋭い表現を以つ

て、觀賞者に迫るものがあつてこそ、川柳として高く評價されて、いゝものであらうと思ふ。

琴人……御説に同意します。

路郎……今述べられた山雨樓氏の説に異議は無いが、もう一度私としての意見を述べて見やう。此句を讀んで頭から、作者の病人である事を決めてかつたといふ事は、少しく早計であろうと思ふ。假令作者が病人である事を知つて居ゝも、句が持つて居る内容の表現力に就て吟味して見る必要があらう。此句を讀んだ時に、第一作者が孤獨である事を思はせられる。句の表現方法としては、稍抽象的ではあるが、或る種の諦め觀を出して居る。それ丈けの内容で此句の價値を判斷する時には決して拙い句だとは云へないけれ共、極く匂ひの高い句だとは云へない。併し飜つて作者の境遇を知つて此句を見ると、少しく句の内容に趣きを變へて來るやうに思はれる。嚴密な意味から云へば、句は作者の境遇と切離して批評すべきものではあるが、作者が實感を咏んだ場合には、其句其ものから作者の心境がはつきりと浮び上つて來る筈である。にも拘らずそれ丈のものが浮び上つて來ないとすれば、其句は表現上に瑕瑾がある〻見る事が至當ではあるまいか、其點から考へて來ると、作者の意志が此句には充分に出て居ないと云ふ事になる。十七字詩の表現の難かしさが其處に發見されると思ふ。

山雨樓提出

私がしたのだが默つてゐよう

繁　坊

山雨樓……表現が變つて居るので先づ眼を奪つた。俗と云へば俗、平凡と云へば平凡の樣たが、味はつて見ると自分の腹を取出した樣な痛切味を隱してゐる。路郎氏が十一月號に於て「鈍角と鋭角」と題して述べられて居るが、此句は鈍角の樣で鋭角な處が潜んで居る樣に思ふ。これ丈の眞實が咏はれてこそ川柳の尊さが思はれる。

ひろし……一讀言葉の端くれの樣であるが、此言葉が出る迄に經る處の心の中の葛藤が句面に表はれずに感ぜしめられる。表現が幼稚な樣であつて、中々含蓄がある。

紋太……僕は物足らない。斯ういふ場合がよくある事は同感出來る。併し句にする場合には特に句にする丈の特殊な原因を今少し示して欲しい。唯此句の示す處を受取つた丈であると、特に句にする程の理由が無いと思ふ此儘の氣持であるならば、一層の事私がしたのだが句にしないでゐ樣、と云ふ樣な氣持であると思ふ。それ程僕は此句に感興を引く事が出來ない。

山雨樓……紋太氏は句にする程の特殊な原因が受取難いといふ御説でありましたが、川柳を作る事は所謂生むものであつて、必ずしも原因結果の法則に從つて左右されるものでは無からうと思ふ。人が戀をすると云ふ事は人の本能であつて、理屈ではないと同樣に句を作るといふ事は特殊な動機とか原因とかいふものが無ければ、生れないといふものでは無からうと思ふ。つまり詩は高潮した感情のリズム的表現に他ならないので、此句の樣に怖れをなす程に、心の動きを感じた場合に、創作の筆が伸びたのは、何等不思議のない事だと思ふ。

紋太……僕は此句の出來た動機が知りいたと思ふのです。唯怖れ丈を示して、感じたものがないと思ふ。

山雨樓……僕の感じたのは、其怖れをなした事に川柳を感じたのだ。此處迄人間は眞實を怖れる感じがあるものかと、其怖れを見出した事が、斯う叫ばせたのだと思ふ。

紋太……僕は怖れを見出したとは思はない。唯怖れた丈であると思ふ。唯怖れを述べた丈では句にしないでもいゝでは無いかと、少しきつい樣ではあるが、そういひたい。作者は何かを感じ、或は事件を示さうとして此句を咏まれたのであらうけれ共、私は此句の上に表はれたものを受取つて、そうとしか思へないのである。

ひろし……紋太氏の求められる、原因とか事件とかいふものを、此句が句面の裏に潜ませてゐるのが面白いではないか。

紋太……僕に其が解らないと云はれては、恥かしいが、併し此句の樣な場合は種々な場合に當嵌まると思ふ。人が表はれてゐない。場所も解らない。無論事件も解らない。唯余りに一般的な云ひ方であると思ふ。

山雨樓……僕が面白く感じたのを卒直に云

ひませう。最近に僕は此句の樣な、事件に遭遇したのです。夫れは或多人數集合した場所で、或人が靴を紛失した。誰かが間違つて穿いて行つたのであつたらうが、其替りの靴も解らなかつた。其場所に居合せた僕は勝手に殘つて居た靴を其人に穿かせて歸らせた處が其靴の持主がやつて來て、自分の靴の無い事を心配した。其處で僕が正直に有體を告白すべき筈であるのに、自分は咄嗟の間に嘘を云つて、何知らぬ顏で居た。(先きに自分が靴を穿かせて歸へした事には、そうしてもいゝだらうと云ふ根據に就て朧氣な自信があつた)此事が僕の良心を何れ丈け苦しめたか知れない。夫れならば何故其の場合に正直に告白しなかつたかと云ふに、僕の心の內に汚點が潛んで居たからであります。此句はそうした場合を最も鋭く强く抉つて居るので、僕が打のめされた樣に感じるのであります。此句は自分の腹を取出した樣な鋭さを さうした表現に依つて示して居ると感じる事 に依つて共鳴して戴く事が出來ないでせうか。

紋太……そうした場合のある事は 僕も認めるのですが、併しそんな場合が子供にもあるし、大人にもあるし、男にも、女にもあつて餘りに普遍性が此句にあり過ぎると 思つたのです。今山雨樓氏の御話を聞いてゐる內に俳人の放哉といふ人の「入れ物がない兩手で受ける」と云ふ句を思ひ浮べました。或は私の味ひ方が、味ふ心持が散漫であつたかも知れません。此位にして他の諸氏の御意見を承り度いと思ひます。

路郎……大分議論が沸騰した樣であります が 先程紋太氏が云はれた句の人物がはつきりしない、場所が解らない、事件が明瞭でないと云ふ事に就て 少しく述べて置き度いと思ふ。成程從來の川柳は必ず其等の內容を要求して來た。だから句を分解して其等の點に缺陷があれば、其句は再考を要するものとして取扱はれて來た。けれ共私達の廣い意味の川柳、新しい川柳の圈內はより以上に擴大されて、人間其物を眞二つに截斷した處から生れて來るものとされて居る。此句が何だかものの足りないと云はれたのは 上述の理由からであらうと思ふ。又餘りに普遍的なものを摑んで居る樣に思はれると云はれたのも、其點からであらうと思ふ。併し此句の私なるものは、其作者であると同時に、人間全体を指さしたものである事を思はなければならぬ。ルソーの懺悔錄を讀んだ人達は、餘りにも平凡な自分達と同じ行動を執つて居ながら、自分等は其をあからさまに人の前で 告白し得ないにも拘らず、ルソーが大膽に卒直に其を云つてのけたその偉大さに、大きな感激を持たされて居るのではあるまいか 此句に於ても人間本能の弱さ「或る惱み」を凝視し、一句として投げ出した處に 句の本質的價値があるのであらうと思ふ 其點に於て山雨樓氏の句に對する解釋に贊意を表する。

ひろし……作者は子供ではないでせうか。

路郎……小供ではないでせう。

琴人……觀賞價値が大分に 高められて居る樣です。作者に敬意を表して置きます

紋太……嗚呼、此句が「私がしたのだが默つて居る」だつたら僕も何も云はなかつたかも知れない。もつと熟考して見ます。

琴人提出

此岩になじみあり釣を垂る

可村

琴人……ごつごつと云つてあるが、又それ丈親しみのある句だ。岩によせてゐる作者の氣持がよく表はれて、親しみ深く感じます。

ひろし……釣は糸の方がよくはないか。

路郎……それは糸の方がいゝだらう。

琴人……優しくなりますね。

山雨樓……僕は此句は川柳 になるべく感激が淺いと思ふ。これでは淡い追憶の情を偲ぶに過ぎない樣で、場所や事件に對してもさしたる働きが無い樣に思ふ。下五の「釣を垂る」は釣といふ字だけでいゝから、もう少し句主の川柳味の焦點を摑んで欲しいと思ふ。

ひろし……山雨樓氏の求められる 深遠なる川柳ではなかろう。併し「此岩になじみあり」と持つて來た處は釣を樂しむ人の岩に對する親しさが出て居て、大自然の懷に抱かれて快く大公望を決め込んで居る有樣が 目に浮んで來る。

琴人……斯ういふ句に對する尖鋭な 感激を求める事は何うかと思ふ。矢張親しみ深いといふ點を受入れるべきであらうと思ふ。

山雨樓……僕の注文した事は、何でも彼でも尖鋭なものでなければならぬと いふのでは無くして、此句の場合下五の「釣を垂る」を今

少し働かして貰い度いと云ふのである。
琴人……其點には異存はありません。
山雨樓……それに依つて 句主の川柳味の燃焼を望み度い。
路郎……此の句を讀んで、唯釣好きがなじみある岩で釣をしたといふよりも、僕には郷里に歸つて居る人の平靜な生活、而も幼ない頃のなじみある岩に來て、糸を垂れて居るといふ感傷的な感じを豚んだものでは あるまいかと思ふ。さう解釋したならば、句が幾分いゝ意味にとれるけれ共單に釣に來た、此岩になじみがあると云ふ丈では 凡句に近い樣に思ふ。
ひろし……「郷里にて」の前書が欲しい譯ですれ。
路郎……前書は無くても 此岩になじみありと最初に強く投げ出した表現方法から、それ丈の感じを受取れないものであらうか。
山雨樓……此岩になじみありと 強くいひ表はした事は可成選ばれた表現 であらうと思ふ。其處が句主の川柳の狙い處であつたとしたならば、今度は岩について或は其親しさに就いてもう一歩表現上の苦心を望み度い。
紋太……兎に角自分の言葉で 自分の思つた丈の事を云ひ得て居る事は 此句の價値ではないかと思ふ。味ふ者から云へば、ごつごつとした叙法であるし、物足りない感じは確かにある。句に「此」と云ふ字を使つた場合は句を萎縮せしめる事が多い。
琴人……可成感激が出て居ると思ふ。

川柳塔　路郎提出

逆とんぼ打つて社長を出迎へる

杏　三

路郎……サラリーマンの悲哀を 丸出しにした句で可なり辛辣な自己批判をやつて 居るのが面白いと思ふ。
琴人……この句は句主の自嘲句で 實によく言へてゐると思ひます。
ひろし……資本主義がある限 界に達すると もう人間を必要としない、搾取された殘骸はどん〳〵ほり出される。そこでブルジョアの分け前にありつこうとする サラリーマンにとつてはたゞ資本家の御機嫌に縋り、媚を呈して幾分でも多く分け前を戴かうとする。そうしなければ首さへも危ない、そこでこの句の樣に大騒ぎをして社長の前に 叩頭是足らずの狀を呈する無自覺な 無産階級の卑劣さに對して痛烈にやつゝけて居る。階級意識を呼び覺ませてゐる句である。
路郎……今分け前と云ふ事を云はれたが、サラリーマンは決してブルジョアと 分け前をするのではなくて、お餘りの幾分を投げ與へられるのに過ぎない。分け前となると對等の問題となつてくる。聊か辭齣の揚足とりであるが辭齣はなるべく適切なものを 用ひて貰ひたいと思ふ。
ひろし……かしこまりました。その意味です
山雨樓……矢張り人間を表はしてゐますれ。悲哀も感じる事が出來る。淋しみも覺える事が出來る。又實に面白い人物も活動してゐるちつとも隙のない、しかも今ひろし氏が述べられた樣な思想的背景をすら藏してゐる。この句は前に評した繁坊氏の句の樣 に自分の掌にのせて味ふ事によつて面白味が益々加ふる樣に思ふ。つまりこの句がさうした面白さを齎らす事は、やはり實感に根ざした創作である事に依つて、それだけの根强さを齎らしたものであらうと思ひます。それで假にこの句が川柳を作る巧みさから 作られたものであるとしたなら、到底これ程に響を與へ得ないだらうと思ふ。
紋太……面白いとか巧いとか云ふの には少し題材なり思想なりが平凡だと思へるが、自己の句として判つきりと 表現された點がいゝ所として肯けると思ふ。

紋太提出

月も見ず其階級の話をし

圓　角

紋太……僕の好き嫌ひから云ふと、この句の樣な表現の仕方は 好きな部類の方です「其階級」と云つても所謂尖鋭な分子ではないと思はれる氣の樂な中産階級の人が 幾らか話に油がのつて階級意識を論じてゐると云ふ情景が思はれる。その氣の樂なと云ふ所が僕の好む所である。
ひろし……作句に日の淺い作者であるから、云はんとする所が判つきり出て ゐないのではないかと思ふ。僕のとり方ではブルジョアと云ふ程ではないが、稍ブルである所の人が月見に寄つて、その月も見ず無産階級の話を

して恐わがつてゐるのではないかと思ふ。紋太……「其階級」は自分達の階級のことゞ幾らか不平の交つた話になつて來た事を示してゐるのではないかと思ふ。

ひろし……「話をし」と云ふ叙法から見ると月を見てゐる人々の階級の話でなく、他の階級の話の樣に思へるがどうですか。

紋太……他の階級と云へば下の者か上の者の話をしてゐると取つてもよいと思ふ。「月も見ず」と云ふのは月見をしてゐる團欒と云ふ程の意味でなく輕く月が出てゐるのを忘れと云ふ程の意味であらうと思ふ。

路郎……僕は月見の句と思ふ。僕は「月も見ず」は月見の意味に解してゐる。其階級は話をしてゐる階級の事である。この句を讀むと先程紋太氏の言はれた樣にどつかに中産階級しかも幾らか有閑階級らしさが出てゐる樣に思へる。その人達がプルジョアとも思へないし、又無産階級の人々である樣にも思へない。「其階級の話をし」と云ふ言葉が直ちにその階級に對する問題を論じたと言ふ樣に解してゐられる樣であるが、この場合はそれ程強い階級的な話ではなくて、その人達に限られた多少の不平自惚と云つた樣な話をしたぐらひに解するのが穩當ではあるまいか。

孥人……その話は何處までの階級を話し合ふたのか、プルジョア對プロレタリアこの二大階級が判然と今日では一般に意識される樣になつた。そして日々爭つてゐる事を新聞紙上で見ると、從つて中産階級にゐる人々もそれ等の事は判つきりと意識されてゐる。そこで月見してゐる時に圖らずもさうした階級の話へ話題がのぼつた、よく考へて見ると矢張りそこには自分そのものに階級と云ふ點が判つきりと意識されて來る、さう云ふ氣持が一般の爭議等の事に及ぼして、互ひに熱が出てよい月も忘れ、その方へ全部が集中されてゐる所を表はしたものがこの句であらうと思ふ。そしてこの句の仕立方の上に「話をし」と云ふ下五の云つた言葉の中に其人達が無産者でないと云ふ事が受取れる樣である。

ひろし……各評者の色々なお説に解釋されると云ふ事がこの句の缺點である。それは作者が階級と云ふ事に就いて深く認識してゐない結果であり、生溫るい表現のためにこうなつたのではないかと思ふ。無難なのは路郎先生のお説の樣に解するのが適切であらう。

山雨樓……初め紋太氏が述べられた氣の樂なと云ふ所こふ云ふ表現が好きだと云はれた所に就いて紋太氏の川柳觀の一端を覗ひ得た樣に思ふ。勿論川柳の持味、味ひ方、叙法リズムと云つた樣な部門に就いて、各自獨自の見解があつて自分の信ずる事を直ちに他の人に強要する事の非なることは云ふまでもないが、各自個性を持つてゐる以上、そこに變つた思潮を描くことも當然であるし、又それによつて川柳の進化を期すことも出來る譯であるが、この事は假にも句の批評をしようと試みる上には出來るだけその主張を明らかにして置く必要があると思ふ。その意味に於て紋太氏がこの句の樣な表現を好まれたと言ふ事に就いて敬意を表するものである。この句の場合先程ひろし氏が述べられた樣に皆さんの取方がまち〳〵になつて、句の必然性を薄くしてゐると云ふ點は認められるが、その創作の心持に於て紋太氏の主張と似通つたなだらかさが窺はれる事はさうした川柳を味ふために忘れてはならない事だらうと思ふ。我々は句の批評と共に主張の批評と云ふ事により多くの精進研究を要するものである事を痛感する次第であります

（春三・愚陀樂記）

合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附（金文字入）で書架を飾るにふさわしい簡素な裝幀に出來ました。

第一卷及第二卷　各金五圓也
第三卷及紙四卷　各金參圓也
第五卷昭和參年分　金參圓也

當分第五卷に限り　**特價金壹圓五拾錢**　送料十八錢

尙古い川柳雜誌御入用の方には特に左の値段でお頒ち致します。いづれも下記宛御申込下さい。

第二號より第四十七號まで　各一部　金拾錢
第四十八號より第五十九號まで　各一部　金貳拾錢
（但し一號九號十二號廿一號廿五號廿六號廿七號はありません）

川柳雜誌社事務所

川柳塔

○　岩本素人

もの言へば治安警察法があり
友の名を共産黨の中に見し
左傾した弟母こうまが合ひ
氣の毒な無心へ返事書澁る
氣が若いこはさても淋しいお世辭かな
質店の菊の手入れの行き屆き
カフエーの畫を小菊のしほれてる
禁酒する氣持ちへ引けのベルが鳴り
特高課いやにやく笑つて來
本當の事を商人風呂で言ひ
尊影の畏れ多くもオフセット

○　朝田新水

酒褒めて身体の惡い酒屋なり
飲めばもう世間恐れぬ癖があり
或る時は意張つた事のおろかしく
實例へ友の名ばかり遠慮して
佛檀へ祖先の威光まぶしく見
帶一つ締める女の上手下手
裸体畵の肥へたは腕を組んでゐる

○　松丘町二

酒だけが自分を知つて呉れてゐる

身を落す履歴書の嘘寂しくて
空を心を秋が歩いてゐるなり
三部作葉巻芋蟲ブルジョアジー
貧すぐに口を尖らすこと多く
冬の案山子君も失業しましたね

郷里なる農夫ら（三句）

ごめんなさい案山子と思ひ違へてた
爐の灰にうづめる芋がたんとあり
娘ら哀し乳房を雨に濡らされて

福岡の獏々君へ

黄菊白菊寂しきことは思はぬよ

中島鐵州

○

小妻と上阪

交叉點妻小娘の様になり
五十錢タクは女房もイヤといふ
女房にチップの高を尋ねられ
哥澤に凝る夫とも知らず居る
里の母敷居へ油してくれる

住田亂耿

○

耳かきを持つて來させる夜の父
煙突の下に眼ばかりうごめくよ

安井ひろし

○

いつ首になるやもしれぬ靴の減り
金策にうちのめされた服の濡れ

痔疾全癒

まじなひに頭あがらぬサイエンス

共產黨狩

さかしくも濱の眞砂子の盡きしと思ふ

淺井冷々子

福本イズムのはかなきスパーク

○

頭のいゝ時には讀んで笑ひもし
ゆつくりと小禽の所で見合出來
春よ春好いてた柄がやけて來た

出口雨町

○

二日醉頭の中に獨樂がまふ

映畫「生けゐる屍」を見て（一句）

法律の犯した罪はごう裁く
土地會社鄕土詩人を悲觀させ
文才を父は認めてくれぬなり
齒醫者から見ればねきのもほつとけず
金持に子供はたつた一人きり
きゝわけた子供へしやくりしつこくて
又一人客わり込ます上かんや

カフエーにモボのうかれた足拍子
洗ひ髪あさの豆腐やに買ふ氣なり
餅つきへ姉は丸める役にされ
敵娼の寒がるこさも嬉しくて
金持へ言ひたいこさが齒につかへ
鷄も連れをさがしてゐる樣子
カフエーの外へはゞかるジヤズバンド
親類は俺に百姓さす氣なり
債務者の方がラヂオを取つてをり
御勉强ですなさいふて腰を掛け

松盛琴人

○

淋しい心へ友の顏交錯し
いみじくも光りの見ゐし樣子なる
病院さ會社へ夫婦朝を出る

水谷鮎美

○

落椿からだもらくになりたれば
さまゞの姿のなかにうつむけり
魂を金のすがたに踊らせて
神のあるこさを信じてやまざりき
次の日はいつそ小さく日を暮し
ゆるす氣になつてゐるのも知らぬなり
主義者の兄は自殺してゐる

このごろ

父さゐてさびしく宵の白湯をのむ

岩崎柳路

○

ダンスホールの營業停止又一つ
プラットで伸びをして見る永い旅

酒井駒人

○

婦女界の記事に感じた今日の妻
丹精を笑つた人に菊を見せ
叱られた子が硝子戸に何か書き
乳母車男が押せば子は坐り

伊藤綠之助

○

新曲にみんな寄つてる女教員
彼女病む（一句）
こち向いてダリヤが紅い水枕
死のおさづれ（一句）
今日中が保てまい午餉の茶漬食ふ
さびしき日はつゞく（一句）
やはり事實か棺の白さよ
自首をする覺悟煙草に火を點ける

○　橋本二柳子

雨模様に戀人があればなど思ひ
チップをあてに錦紗が出來る
吸ひがらも數へ妾の欠伸なり
右左女を金ですはらして

死産（二句）

寢てゐるのやと死んだ子を抱いてゐる
金持ちとくらべて見るは正氣なり
甲と乙AとBやつぱり差別なり

◇　阿部閑生

この人と酌めども醉はぬ情けなさ
愛犬の淫りごゝろを叱れども
贋の母子叩く眞似せば泣く眞似し
手の平の生命線の斷つところ

◇　若井たけし

謠曲なぞ煙たき青春
下駄を見て藝妓は客をあてゐるなり
青柳をお經の如くやつてのけ

或る遊女に

口紅を齒にゝぢませて憐れなり

◇　西村市公

ぼろかつた事を女給もさとる今日
重役であつて老眼鏡もよし
受付の巡査唇厚い人
面會の父にすけないとは思ひ

◇　島田翠峯

變人で通せば女來てくれず
惡る者になつてゐるのも親心
捨てられた方がましだと妾云ひ
助けたは餌に飢へたる十姉妹

◇　水田桐郎

二十九もをわりだ髭でも落さんか
緊縮が俺を日向に親しまし

◇　中澤濁水

收賄と聞いた叙勳に二度呆れ
飛び逃げる方からたゝむ合羽干
折角のお剛染をすて轉任し

◇　松村敏郎

長幼の序の無い邦語聞き慣れる
何時の日に時計を見ない身にならう

田中前首相の訃

張紙へ自殺の說が寄つて來る

帝大教授近藤博士と大阪鹽野製藥會社鹽野重役來桑（二句）

遠縁の博士へ移民親しまれ
重役の四千里外へくだけやう
神聖と稱へられ豚と住み
手折りたさ二番の梨へ除行する

柳友牛僕氏令息齒科大學卒業（一句）

入齒とは知らず齒並をほめられる
アメリカに指太り行く帝大出

練習艦隊雜詠（二句）

子供もう棒を吊して擧手の禮
水兵を素氣なく通す働く身

友人某々の出産と結婚（二句）

鎹へ無口の父も齒を見せん
宣言の通り金力嫁を呼び

◇　中見光路

拐と値に母子果しがつかぬなり
釣堀りに暫しの宿と知らず住み

◇　清水光風

初冬の夜道を行けば風白し

◇　牧田普門

獨り身であつた頃とは氣が老ける
病院で暮し手拭よく破れ

臨終の友に贈る（四句）

我が食べるものを控へていたわりぬ
念佛を唱へてやればうなづきぬ
藥瓶とバナナと枕元寂し
寫眞だけの形見に供養してやらふ

◇　池田雪峰

戀を他所に赤い襷のかいぐし

◇　安西杏三

買收のすしとは知らず妻が食べ
友人に逢ひ特價品買ひそびれ
遠く近く死の恐怖を弄び

京都叡山行

大原女のものに動ぜぬ姿なり

◇　櫻井圓角

驛へ來て三等で行く氣の挫け
ありすぎる金を使ひに出かけたり
宮島の驛の小さいも床しくて
お前居ず錦帶橋を寒うふみ
驛長と一目で分る帽子を着
飴ン玉親子三人が頰ふくれ

◇　永田里十九

哥澤も習ふて見よういゝ生活

石竹氏の句

阿部閑生

異色ある作者としての、石竹氏の句法を究めたい爲めに、手元にある川柳雜誌を引繰返して見る、彼は有らゆる方面に材を拾つて、しつこりと自分の心を溶し込んでゆく、そして極めて自由な形にそれを表現する點に於て、最も惠まれたる天禀を持つ一人である。

遠目から勤めて居るを見て戻り
皆寢よといふのを妻は立ちかねる

これ等は彼の作としては最も凡な部に入るべき句であるが、何處かに云ひ知れぬ妙味が泌み込んでゐて、幾度讀んでも飽かしめない。

ゆるされぬ妻へ子供がはうてゆき
妻へなつかぬ子を裁いて出る
包を解いて親を味はう

實にうまいものだ、許されぬと云ひ裁いて出ると云ひ親を味はうと云ひ、是等の文字はペンの先で書き撰んで得られる用語ではない、詩想と云はうか、句材と云はうか、その現はさうとする所のものを、長い間腹で温め、胸で抱きしめ、頭で考へ扳いて居るうちに、自ら產れて出る妙音である。一句の深さは一句を產むまでの胎致の深さである。斯うした不斷の修練は、特にその箇々に就いての苦心は要せずとも、句法を奔放自在ならしめるものだ。

電報々々うちかしら起きる
珍らしき雪祖母負ふてやろ

いよ〳〵出て巧妙である。これらの句形は格別この人の句に限つた譯ではないが、內容その儘の自然さが最も自由に現はしてゐる所に、他を拔ん出た特長がある。句の中へ全心を沒入し全然それになりきつて了つてゐる。

たんぽゝの種傘さして何處へゆく

草木蟲魚に好んで材を取るのも彼の特色の一つである　が人

事を離れて川柳の効果を收めるのは至難の事であらう、この句の如きは其の上乘のものと云ふべきである『種』の一字やゝ不消化ではあるが、

蛙ふくれるな埋めてかへすよ
藁を敷きかへ牛の氣で寢る

まさに地來の奇想である。うまいなあと歎賞する外はない、底知れぬ井戸から音して水が溢れ出る趣きがある。

お陽さま着物着ますがお許しを

こりや警句だと評者が驚くと、作者は亦評者の意外な言に驚いてきよとんとするであらう、そうした個性の全豹がこの句に躍動してゐる、何がさて、何う説明なぞの出來るものではない『石付さん裸にしますお許しを』と云ふ意氣込みで少し亦裸な彼を究めて見たいのであるが、それよりも更にぐしゝと、普遍性を缺かぬ範圍に個性の際立つた佳句の發表を希望して止まない次第である。

同氏の句を見出さない誌上には　一點淋しい穴があく。

少年ひかるの死

松盛琴人

角力が米俵擔ぐ位は當然の話だがバケツ一杯の水も重しとする女性がそれ火事だいふと簞笥こつゞらを重ねて脊負ひ出す程減法界な力量を現はす、之はごう考へても不思議な力だ此間も七歳の小學兒童が水に溺れた子供を同年の子達と協力して助けたといふこれも一時は嘘だと先生等も思ふたと云ふてゐる。

矢張り懸命の處には異狀な力が出ると見ゐる。

持上げ引上げる力　其處へ精神力が伴ふと超越した力が出る無い力が出樣道理が無いと考へられるが人間には科學で説明出來ぬ類のものが往々にしてある。

本誌の近作柳樽の中にこの四月頃から名を列べてゐる少年柳

人ひかるといふのがある。本人は痩た小柄な色白の美少年で今年十七歳純情で柔和な男の子であつた。いつも阿波座の句會で默つて隅の方で作句してゐたそして出來た句が披講される段になると列座の大人を驚かす樣な句を吐いて居た。内容のよい句になると何うして斯んな句が未だ川柳を知らぬ子供に出來たらふと選した後で思はせられた事も一再ではなかつた。將來見込のある賴母しい子供と注意して指導してゐた處メキ〳〵上達する。頭腦明敏一を聞いて萬を悟る天才兒とまでは指導の日淺くして見分け兼ねたがなにしろ句は日一日と進歩を示した。

其少年が突然死去したと聞かされて驚いた。其死を語る者暗然としていふ。十六日の晩でしてひかる君が來て投句用紙を呉れと云ふからやりました處が其翌朝には恪血して死んでゐるんです。あの投句用紙に書いた句が最後のものとならうとは私にも考へられませんと。

十一月號近作柳樽に出てゐる句が若しそれならば豫期せずしてそれが辭世句となつた譯だ。尙且つ讀んで胸を打たれる句だ

人間つてもろいや馬にはねられて　ひかる

少年ひかる一生涯を通じて詠じた句二十數句だそれを思ふと餘りに句の少いのと生命の短かりし事が淋しい。併し其二十數句を見ると死期の迫ると共に句が急速度に尖鋭化されてゐる。それは自然が與つた或る超越した力ではあるまいか人間に若し靈といふものがあるなら正しく其靈は彼の死期を知つて活躍を開始して川柳の上に超越した力量を示現させたのであらふ。

ひかる君は十七年間の短い生で此世を去つた其處に遺したもの何も無かつたが唯だ一ッ彼が全生命をかけた川柳が有つた。然もそれには超越した力の籠つたものが數句遺された數は尠いが人間として最も意義深い尊いものでそはひかる君の魂である事に私は合掌せずには居られない。

今茲に玉石混合順を追ふて其全部を展す。

（昭和四年二月より初めて同年十月十七日死去迄の句）　ひかる

椽へ出て藤咲いたのを伯父に見せ
買ひもせぬ品をこやかく女客
賣れてゐる店へ隣の客のぞき
笑顔だけで送られてゐる泊り客
虫歯なら俺にもあると人へ見せ
近頃に流行るフエルト姉は履き
我々を荷物にするもエレベーター
泣きやまぬ子供へ凧を貸してやり
友達に負はれて屋根の羽子をとり
女將から藝者は嫌な事をきき
鐵瓶の値打を聞いて撫でゝみる
蔭口をすつかり三毛がきいてゐる
江戸ッ子で職人あらい言葉也
まことまらぬ話に仲人幅をほめ
辯人の足音かるう戻つて來
小娘へ浴衣の似合ふ夜が來る
干乾びて手拭柱に懸つてゐる
フエルトの後から下駄の音早め
隣から貰ふた下駄の小さすぎ
降りだした雨へ市内の傘の渦
お早うといふに無口は欠伸をし
人間つてもろいや馬にはねられて

一路集

（募集句）

外人

佐々木三福選

外人の東京辯に聽き惚れる　凸瓢
三等へ乘り奴さんラシヤを持ち　吐句坊
外人の尻の邊から金を出し　四五磨
通譯の首から先きに草臥れる　山茶花
外人のまた日本語へ往きつまり　湖舟
鮮人をまだ外人の列に入れ　空山
外人に袂は無駄なものに見ゑ　嘉月
値切る事知つて外人住み馴れる　沐天
外人に通ぜぬ英語五年間　鯉友
拳闘で見る外人の腕つ節　佳水
日本通女樂に來て寫される　圓角
外人と思案の外の戀にもゑ　沒食子
曲藝の中に黑ン坊一人ゐる　花夢
八方に眼を感じてる外國人　勝二
支那人の何か出さうな家に住み　青柳
車窓から富士を見つけた外國語　孤愁
素晴らしく洋化したなを見て歸り　湖山
外人と話をしてる汗を拭き　一柳
親日家にされて母國に遠く老ひ　柳兒
ラシヤ賣りに故國を聽けば笑ふ　綠之助
外人が通つて子供泣き止ませ　佩琅
外人の歩調と二三間合はせ　鐵洲
外人の子供他人の樣に連れ　冷々子
奈良の鹿外人の手に屆きかね　芦穂
女店員外國人に堅くなり　朝日
外人の客へ極道役に立ち　萬樂
長松のやうに外人貸浴衣　文芳
外人の散歩一人はぶら下り　菊路
外人の煎餅へ鹿の群れて來る　桂枝
外人へ車屋チヤンと心得て　清路
外人と有りし日を見る乃木神社　山月
コンニチハから英語になる應接間　勇宗

杭全町 MEMO

二柳子

▼年末氣分が迫つて來ました。柳友諸氏にも御多忙の事と思ひます。お蔭で本誌も何等支障なく本號で第六卷を刊行いたしました。今後共よろしく御後援の程願ひます。

▼堺支部で一周年記念句會を十一月十六日の夜堺市内開口神社瑞祥閣で催し、なか〳〵盛會でした。會報は次號に掲載。

▼社友越田久水氏は高岡新報、富山日報の新聞柳壇を開設され、柳界の爲努力されてゐられます。

▼同人安井ひろし氏は、十一月十四日近江の社友若井たけし氏の宅へ行かれ日車氏を訪れられたが病臥中だつた由。

▼十一月九日、川柳すゞめ吟社の藤島茶六氏が本社を訪れられ主幹、紋太、ひろしの諸氏と共に「萬よし」へ行かれたさうです。

▼尙　道頓堀蠣彌での歡迎宴に、私は勤務の都合上出席出來なかつたのは甚だ遺憾でし

驛賣の品に外人こまるなり　二柳子
外人へ見せる手段の指の數　虫二
觀光團みんな苦の無い顔で來る　潮多浪
支那人はアイアムジャパニース　敏郎
傘持てば外人軒にこごきさう　折草
外人へ櫻の花がごつこ咲き　清水
讃美歌は外人のゐる聲になり　耕民
外人に寄りつく子供寫される　新水
根氣よく聞いて外人往つちまい　草石
碧い眼の子　日本の名を附ける　麥角
松竹座外國人が二三人　勘八
外人こ巡査困つた顔で立ち　凡句郎
腹立てゝゐる外人の日本語　大黄
笑はれた事も外人知つてゐる　四方路
通譯は外人の鼻見て話し　喜天
外人の鼻は片手でかめるもの　光路
外人が丼食つて面白し　柳影

故國遙々こ外人の皺さだを
日本を故郷にして歸國する　亂調子
佳吟
サムライの儘外人こ寫される　凡句郎
久々の歸朝毛色の異ふ妻　八歩
觀光の俥顔見世程續き　市公
無雜作に車夫外人へ呼びかける　不然
外人にいこ高々こ富士の山　綠之助
外人のハッピ姿で嬉しさう　鐵洲
戰爭もよそに日本に住み慣れて　二柳子
外人の運轉手では無い亭主　虫二
人種別さて黑ン坊は違ひすぎ　玄絃堂
(人)我が國の趣味にひたで親しまれ　耕民
(埋)外人の中に小さう子へ稼ぐ　敏郎
(天)外人に小さな恐はい國があり　喜由
(軸)國境を越へて確り手を執ゝ　三福

就職

三田へ就職難が死んでゐる　柳影
就職の口は出來たがさて身なり　鯉友
職長はいゝ人らしい來いこ言ふ　花夢
五枚目の履歴書やつこ役に立ち　みや子
たよりない就職口こ思へども　紫電
ごうしても就職口のないベンチ　一柳
口入屋で今日も慰められてる　大黄

岩本素人選

履歴書の到着順に呼び出され　麥角
前祝ひ丈けで就職又外れ　草石
就物の考査へ履歴見直され　耕民
就職の便り老母へ讀み聞かせ　さだを
俺一人雇ふ餘地なき大都會　亂調子
就職のそれから先を考へる　佩琅
衿垢に未だ就職が見つからず　折草

た。(會報を參照)

▼高田茶撫郎氏は、石川縣大聖寺町から柳誌「風見草」を刊行されることになりました。雜誌の題名は路郎先生が命名されました。

▼永田里十九氏が今回新に社友として入社されました。

▼田中彩秋氏は、十一月十二日目出度く長男を擧げられました。

▼柳誌「野菊」京都市外深草町下河原二七野菊川柳社から發行されることになりました。發展を祈る。

▼大久保大夢子氏は、暫く川柳から遠ざかつてゐられたが再び作句に精進されると。

▼高木ひかる氏は、十月十七日突然格血されて死去されました。哀悼の意を表します。

▼中野雪丹氏は裸人と改號されました。

▼柳友の鶴峯君と十一月十六日泉州牛瀧山へ紅葉狩にでかけました。

▼十二月號の編輯は路郎主幹、琴人、ひろし亂耽、雨町、愚陀、杏三の諸氏と私とで本社事務所で致しました。

移轉

▲島田翠峰氏は大阪市西淀川區海老江町電停前御宮知方へ　▲池田雪峰氏は三重縣飯南

就職の手紙へみんな寄つて來る　里十九
就職に今更悔ゆる事があり　青柳
さん〳〵にとた口がきまつて來　勝二
就職とまではゆかない口があり　雨月
(佳)就職へにやり〳〵家主來る　芙蓉
角帽を脱いで今日から就職難　青兒
初出勤力强くも家を出る　青柳
(佳)大阪の失業者三萬五千弟見送る　正兒
就職の眼へ光つてる靴の艶　勝二
就職を女給一人が知つてゐる　菊路
就職に今日からラッシュアワーなり　悟空
就職難今日と言ふ日が暮れて行き　一羽
(佳)就職へ剃り殘しとく薄い髭　一舟
就職して背廣の襟が氣にかゝり　蚊郎
就職へ緊縮をした朝を起き　山茶花
就職難今更國へ歸られず　孤愁
新婚の妻の早くも就職し　萬々夢
就職難今日は泣き付く覺悟で出　柳兒
就職日足音高く戻るなり　かき松
就職をしたなと洗濯屋は思ひ　公二
就職の今朝ハミガキ粉胸に散り　鐵洲
休職の知事重役になる噂　勇宗
就職に母大丈夫かと念を押し　湖山
就職をしたがやつぱり落ち付かず　幻草
その内にで就職はふひになり　劍阿彌
頼んではあるが頼つては居れず　今雨

就職の話しは腕を組んだ儘　柳月坊
採用の通知に夫婦涼みに出　佳水
就職の目に珍しいタイピスト　柳川亭
就職に親しみ深き辯當箱　鐵洲
初勤めズボンへはねを上げて來る　沐天
就職へ蔓だ〳〵と騷ぐなり　喜天
就職の當分手持無沙汰なり　清路
就職難へ男の子生れたりちとせ　不然
就職に離れともない地を離れ　嘉月
就職の故郷の親を呼びよせる　翠夢
就職へ重役の叔父の偉大さよ　歌泉
就職口探しに町の名を覺へ　雪峰
兄上で就職難の居候　新聲
就職の二日目そつと欠伸をし　英郎
就職をする日惡友訪ねて來　武子
就職が今日からヅボン敷いて寢る　吐句坊
就職の夜を早寢の戸を閉める　英賀夫
就職の月から食費支拂はせ　凸瓢
就職の履歴を書いて肩が凝り　青果
就職の初勘定に質を受け　四五磨
就職の今暫くは着たまんま　同
就職の氣持ち六燭輝けり　空山
この俺を採用しない氣が知れず　同
兎も角も遊ぶよりはと拜命し　沒食子
就職を知らす葉書をかきつぶし　同
就職に質受けの順考へる　萬樂
就職は前後左右に眼を感じ

郡櫛田村豊原へ　▲坪井湖南氏は吳市警固屋町七丁目へ各轉居

正誤

十一月號五三頁山雨樓「朝日の鐘へ儲かる戸をあける」は「朔日の鐘へ儲かる戸をあける」の誤植

新誌友

（四年十一月十七日まで）

「川柳雜誌」前金半年分壹圓八拾錢以上拂込みの讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します、何卒此際新讀者を御勸誘下される樣にお願ひ申します。御紹介下される方には「川柳雜誌」の近刊を見本として差上げますから御申込下さい。（三柳子）

永田里十九、川村觀月、姫田夕鐘（梅田支部）今村荒男、岩佐健次（長崎柳秀）長尾普蛙（山下佳水）田路信（安井ひろし）内村仁之助（竹内多聞）寺地卓二（伊藤愚陀）本田柳一路、山岡巖、越中義雄、定廣金左衛門、北澤袈裟雄、高橋省二、外山蓮、石井突支坊、谷内與一郎、木山さだを、伊藤一騎、橋本言也、馬越玉置、戸倉誠司、三好正、辰己雛風（本社事務所）括弧内は紹介者

就職のその夜何やら眠が冴へて　同
秀才は早就職に奔走し　圓角
友達の親父アッサリ雇て呉れ　同
辛抱は金だ動けば安くなる　敏郎
（佳）就職へヒリピノが來て安くなる　同
就職に喜ぶ妻の痩てゐる　吉絃堂
就職をして現減の椅子にかけ　同
就職の當座叮嚀に印を捺し　無鬼
就職口頼むつもりへ豫防線　同
職のない夫に頼む臺所愛子
（佳）就職の辭令は夢の枕紙　同
あり付いた職に人生觀變り　綠之助
就職の知らせ上海もいゝところ　同
恩に着せながら明日から來いとい　喜由
月給の安さ賄費の高さ　同
（佳）就職の深呼吸して朝を行き　光路
おもちや屋へ就職久し振りに立ち　同
就職に學校の無駄多い事　市公
就職に妻の内職笑い合ひ　同
就職難鴉も兎も倒ふて見た　凡句郎
失業の俺へ就職頼みに來　同

釘

◇　めかく子選

五寸釘ですよと女將笑ふてる　沒食子
釘一つ頼む親爺の弱りやう　亂調子
新聞で包めば釘はさきを出し　嘉月
邪魔臭ひ釘を中途で買ひに行き　同
應接間自筆ですかと見直され　朝日
初めての給料母に戴かれ　同
（佳）就職は一年後の奴の傳手　突支坊
固定給あつてプラ〳〵行くこまる　同
就職へ又一％減つてゐる　女々子
就職難元同僚が怨めしい　同
木に餅の成る樣に云ふ口入屋　山月
飯粒をこぼす朝日の人事欄　幸坊
近付いて見れば貼り紙女手仕事　同
今日からの仕事廐裏買ふて行き　新水
（佳）採用をされる自分の名が呼ばれ　同
就職の朝こまゞゝと母の智恵　虫二
泥棒も乞食も出來ず就職難　同
元の月給の半分しかならぬ　二柳子
（佳）採用の知らせ明日から働くな　同
（佳）就職へ我子の樣に下宿言ひ　太路
就職の挨拶だけで好き嫌ひ　同
（佳）新參のピヨコンと頭下げたが　四方路
（佳）まアやつて見ろと親方言つた　同
友達に會つて少年車掌てれ　同
始めての丁稚へお櫃押しやられ　同

中川めかく子
友潤　貴山

共選

背伸びして打つ釘の位置見て貰ひ　凸瓢
釘を打つ塩所が妻に問合せ　英賀夫
こんな事位と女釘を打ち　愛子
一本の釘に暦なぞ出して　里十九
眞つ直に直し御隱居釘をうち　綠之助

川柳書架（卅七）

川柳風俗志　上卷

西原柳雨著

△著者が嚮に發行した「川柳江戸歌舞伎」「川柳江戸名物」「川柳吉原志」及「川柳年中行事」の諸著より、より抱括的内容を持つて編纂された全三卷の内の上卷である。勿論前掲諸著掲出のものは重複を避けるために省除されてある。

△その自叙に『川柳狂句の總てが悉く風俗資料たらざるもの無しといつて先づ差支はない（中略「川柳風俗志」の編纂を思ひ立つたのは今から二十年も以前のことであつた（中略）何分淺學菲才、江戸は偖置き東京さへも碌に知らぬ一介の老僧夫、何が出來るかと一旦は諦めて見たが夫では何時まで待てば是より立派な書物が出來るかといふ見當は立たぬ（略）兎も角も風俗史の骨組丈なりと世に提供して置いたならその信念の下に此の未定稿を奇剛氏に附す』云々。以つて著者の志が

臺所指圖の通り釘を打ち　文芳
呼れたる大工口から釘を吐き　同
くろうとが打てば素直な釘であり　不然
釘箱に横着さうな五寸釘　花夢
五寸釘だん〳〵効てく槌の音　柳兒
荷造りに一本念の釘を打ち　突支坊
額の位置釘持つた儘考へる　さだを
愛の巣の當座きまらぬ釘を打ち　沐天
釘を打つ音にも大工らしい音　潮太浪
箱を打つ釘を隣へかりに行き　ひかる
釘ざきを叱らぬ妻を淋しがり　市公
無器用な手附に釘はすねてゐる　紫電
寝轉んで釘打つことを差圖する　新水
隣から時計の止る釘を打ち　山茶花
釘箱を女房梯子へ差し上げる　同
指打つた子供その上叱られる　今雨

佳句

女房の背を考へて釘をうち　文芳
釘を打つことこへ家主やつて來る　平一
掃除番知つてる釘に引つかゝり　喜天
女から此處へも打つてほしい釘　二柳子
看板は釘から錆た色を見せ　悟空
(人)女房の意見もいやで釘を打ち　孤愁
(地)釘を打つにも氣短かさを見たり　芦穂
(天)大阪の荷物に釘の多過ぎる　狂雨

◇貴山選

新築は釘の打ち塲に總掛り　劍圃彌
無器用な手附に釘がすねてゐる　紫電
問屋街釘打つ競爭してるやう　八歩
靴の釘本隊ごうに村に着き　麥角
釘抜きにいさゝか丸く抜ける釘　孤愁
螺旋釘面倒臭さは打込まれ　無鬼
口中の釘へ箱屋の手の動き　勇宗
五寸釘繼子はこわいものに見る　青果
ハンモック釘に命を預けて居　清水
遠慮しい〳〵釘に引つかゝり　キヨシ
打つ釘に隣の何かこけた音　喜由
急ぐ釘買ふて來る子の道遊び　鯉友
釘ついたまんま古木はほつされ　翠夢
古釘を抜いてこぼち屋ごうする氣　沒食子
自信ある手附の釘へ痛い顔　憲太
生意氣な弟子はすかに釘を打ち　不然
まあ〳〵と釘を拾つた母の顔　さだを
釘を打つ音に時計はびつくりし　蚊郎
假橋の手摺危ない釘があり　芦穂
釘裂をまたこしらへたかくれん坊　廻樓
手拭に釘に出合つた錆があり　大黃
一人子の釘打つ智慧も乏しくて　圓角
釘みんな打つて大工は唾をはき　公二
白壁へへのへのもへの釘の跡　突支坊
年の暮簾の釘を抜いて置き　雨月
節に來た釘とも知らぬ槌の音　湖山
手加減に今度は右に曲る釘　勝二
釘を打つ所へ家主やつて來る　青柿
妾宅で魚屋釘を打たされる　山茶花
釘一つおいて課長の派手な服　市公
天井の釘から蜘蛛の長く下り　空山
仆けかゝる釘へ職人癇を立て　沐天

奈邊に在るかゞ知られるであらう。

△昭和四年九月十五日發行、四六判、六六六頁、定價參圓八拾錢、東京日本橋區三丁目八春陽堂發行。

△川柳作家には直接役立たないかも知れないが考證家研究家及び德川風俗史研究諸家にとつては是非一本は備ふべき好著である。

(四十五頁よりの續き)

三回ブラックも廻り〳〵つて漸くの事で空塲所を探し自動車をバッキングして又戻つて來て用事を足さなければならないこう數多くあつては便利なもの却つて不便を感ずる事夥しい。

然し一度郊外に向つて遠乘りを試むか坦々砥石の上を辷るが如き道が何處まで行つても〳〵續いて居るので氣持のいゝ事こと言つたら何とも言へない。

米國では其の國の文明は教育こと道路にあること云ふので此の二ッには大に意を注いで居る。

金に厭して修繕した道であるから札を敷詰た程經費がかゝつて居るさうだ。

道路こは人間の通行する處ではなくして自動車の通行する處である。

挨拶が濟まぬ引越釘の音　四方路
涼臺さあ出來ました釘を打ち　新水
十錢の釘もてあます新世帶　草石
日めくりの型が變つて換へる釘　凡句郎
打ち曲げた釘を見て居るもの笑ひ　鐵洲
一本の釘へ晴衣かけ切れず　芙蓉
眼は夫へやつてオーバーは釘にか　愛子
曲り釘意見の通り又曲り　英賀夫
古釘をのしてる隱居に日はあたり　佳水
一本を抜いて延した釘を打ち　四五磨
良い大工釘一本に念を入れ　潮多浪
新聞で包めば釘はさきを出し　嘉月
一本の釘にも暦なご出して　里十九
安い家だが古釘が多すぎる　吉紘堂
ぬかるみをさければ塀の釘で裂　雪峰
折釘へ春のまんまのハンチング　吐句坊
槌の音澄んで素直に這入る釘　凸瓢
臺所の釘女房の音になり　二柳子
釘箱に横着さうな五寸釘　花夢
お臺所下女の打つたは丈夫なり　朝日
隣からごなられた釘用をせず　太郎坊
スリッパは釘の頭に引つかゝり　折草
一本の釘にたよつたをろかしさ　耕民
講堂の床に竝らんで釘光り　柳村
天井の釘へ大工は目をこすり　幻草
五寸釘のろいの聲に逆はず　清路
丁度よい先に住んでた人の釘　虫二
五寸釘年增女に見せてやり　歌泉
指打つた子供その上叱られる　今雨
表札の釘隣から頼まれる　佩琅
釘抜きに馴れて氣持の惡い音　悟空
壁落ちた土藏に古き日本釘　桂枝
氣に入らぬ釘を見付けた大掃除　一羽
立退きは釘一本も意地で抜き　柳兒
五寸釘姑いやな顏をする　菊路
釘一つ賴むおやじの弱りやう　亂調子
打つ釘に長屋の夢が破られる　同
古釘を使つた故國ふりかへる　敏郎
新らの釘勿体ないが見て通り　同
女房の背を考へて釘を打ち　文芳
臺所指圖の通り釘を打ち　同
釘一つまつに打てないゝ暮し　光路
松かざり昭和四年の釘のあと　同
釘の音大工の小僧眠むうなり　狂雨
大阪の荷物に釘の多過ぎる　同
（客）釘買ひに出と家主へ愚痴となり　綠之助
（客）五寸釘大上段に打ちこまれ　湖舟
（客）竹釘で仕組んだ手間を聞かれる　山月
（客）もう釘も利かなくなる破れ下駄　冷々子
（客）踏つぎで落した釘をたのれ　虫二
（客）釘を打つ音氣短かと見うけたり　芦穗
（客）長病柱の釘も抜いて見る　柳影
（客）掃除番知つてる釘に引つかゝ　喜天
（客）器用又ほめられる釘を打ち　狂雨
（客）素人の頼張る釘にゐづくなり　山茶花
（人）門口の釘へ旗日が廻つて來　光路
（地）打ちかける釘にも意地のある曲り　太路
（天）家中の釘女房へごれも入り　光路

年賀名刺の廣告を募る

▽奮つて申込まれたし△

雜誌の上で句や文章を見て、親交を深めたいと思つても肝腎の住所氏名が分らない爲めに、文通さへも出來ないといふ憾みがあるので、川柳家各位の住所氏名を一度に知る便宜はないであらうかとの讀者諸彦の御希望に依り、從來柳友各位の名刺廣告を掲載して來ました。本年も左の便法を設けて廣告を掲載することにしました。どうか奮つて御申込を願ひます。お一人でも多くの柳人の住所氏名が掲載することがこの趣旨にもそふ譯ですから。……特に貴下の御贊同を切望いたします。

◇一口　金五拾錢

幾口も申込んで下さい。一頁御希望の方に限り金七圓一口分の原稿はなるべく簡單に御願ひします。

◇受付期限　十二月十日迄（新春特輯號に掲載）

大阪市住吉區杭全町六〇三
事務所　川柳雜誌社
振替口座大阪七五〇五〇番

廣告御申込は成るべく振替御利用の上前金に願ひます。（二錢以下の切手代用でも差支へありません）

聲

岩本素人

饒舌の首を締めろ。

お饒舌の僕の聲が潤れて出なくなつた。風を引いたのではない。九月七日の夜柳珍堂忌句會の席で選句の披講をしようとすると聲が出ない！二三日前から少し變ではあつたが一ので、ひろし君に代讀して貰つたのである。故柳珍堂は人並外れた無口であつた。必要止を得ない場合の外は決して口を利かなかつた。句會なぞでも初めから終りまで一言もものを言はずに默つて來て默つてしまつたと言ふ位の人であつた。私が川柳家に成る氣を起させたのは柳珍堂の靈魂だと何時だつたか本誌へ書いた。其靈柳珍堂が今度は私のお饒舌を見兼……いや聞きかねて、私の聲を封じて仕舞つたものらしいそりやアだんまりの柳珍堂にして見れば輕薄な私のお饒舌がとても聞い居られないのは無理からぬ事ではあるが、さりとて、あまり殺生な。お蔭で毎日不自由をしてゐる。今日で丁度六十日、未だ以て聲が出ないのだから全く文字通りの閉口だ。

これからはお饒舌は致しません。
駄洒落も申しません。
屁理屈もこねません。
ごうぞ柳珍堂よ。
私の聲を返してくれ。
次には、くだらない事許りを書くと言ふので、右の手なぞを折らずに置いてほしい。そんな事にでもなれば飯の食ひ揚げだ。

昭和四年十一月六日　頓首

冬一杯の水を呑んで

安川久流美

師走號のビルデングに休ませて貰ふ事にします。然し私は疲れてゐるのではありません。浮世師走のビルデングの屋上から世の中を見るのも又意義あるもので

す。この筆を動かしてゐるのは霜月のはじめですからこても師走氣分にはなりませんが、金澤の昨今は大都會の師走よりももつこ冬らしい寒さがするのです。ツク〳〵北國の氣候はいやになる。もう老人や、子供のゐる家では炬燵の用意がされるでせう。

炬燵があるやうになるこ人間がなまけます。こ同時に作句には熱心になりますからそのコントラストが面白い。

革新川柳から新興川柳へ進出して現在では柳壇に影を見せなくなつた、畏友森田一二君も炬燵趣味の男でした。

炬燵から敷島一つ買ひにやり

これは彼の舊作の一つです。既成作品全部を抹殺してしまつた一二君の作を今更公表したくもありませんが　現在でも過去の幻影の消ゑない私が過去の一ページを語り且つ記す事がわけもなく嬉しい男です。

◇　◇　◇

此頃キンシユクこいふ事が流行したのでバットを好きな私も『胡蝶』こいふ煙を吹かしてゐます、僅か一錢の差ではありますがキンシユクは臺所よりも先づ煙草からこして政府の專賣品を賣れないやうにするのも又一興こ存じます。そのくせ一度醉ふてくるこ、エーアシップでもスターでもくすべます。

◇　◇　◇

スターで思ひ出したが路郎氏はスターをキンシエクされて矢張り私こ同じく安い兩切りを吸つてゐられるかこも察してゐます、ナーニ遠慮なくおのみなさい塲末の子守でも少し面がよくて、ハイカラに喋舌れるこ一躍スターになれます、これは一寸洒落て失禮、いくらビルデング屋上で煙草を吸つてゐても句が浮んで來ませんから之で……。

（十一月二日記）

略語解へ

蛭子生

六月號に柳雨翁の川柳略語解がある。

神儒佛ごたまぜにするがらく見世
安くなりましたこ鰹ちぎで買ひ

のガラク及チギは、川柳家が特に假用した略字か、其點は判然せぬこあつたが、これは川柳家の發明語ではなく、省略して一般に用ひられて居たので、正しい用ひ方なのである。

色男國を五匁くれこいふのコクは未だ他の用例に、ぶつからぬ、今後注意してみたい、

立雲の俄に見える向島

タチグモこ讀むべきであらう、夕立雲こいふべきを語占が惡いから立雲こいつたのではなからう、立雲で意味は充分に通ずる。

丁度參考になる新聞記事がある、八月十二日東京に珍らしい雲が現はれたのを、

記者がカメラに納めて、『雲をつかむ』の著者藤原博士に見せた處、『これは珍らしい、立雲の一種ではあるが いはゆる入道雲とは違ひ、英語ではタアーレット・クラウドといつてゐる、…夕立の先きぶれだ・此の雲が出て夕立が來なけりや來ない方が間違つてゐる』と、だから古句の立雲も夕立のお先きぶれと、科學の證明する樣に解して可なりである、夕立雲には相違ない。

×

九月號に無常講に一言した、『史蹟名勝天然紀念物』誌八月號跡部氏の文中、『木崎愛吉氏は其著大日本金石史二卷二〇四頁山城綴喜郡某處石塔の條に、以文會筆記抄に載せたる石塔の刻文、市庭無常講正安二年八月とあるにつき、其石塔を探求されしが遂に所在の不明なりし事を叙し、終りに講とあるのは當代既にその組織のあつたことを徵證すべき資料であると述べられ居る云々』とある、參考にならう。

鳩 其の他

福田山雨樓

晩秋のうら淋しい小降りの中にY市T町のB座は松旭齋大旭一行大藝術團を迎へて興行の幾日かを打つてゐる。今日はこの興行が慰安會の餘興として、鐵道職員や其の家族の眼を樂しましてくれる。自分は世話方の一人としてふと舞臺の裏へ田達に足を運んだ。薄暗い舞臺裏には大道具、小道具が雜然ごちやつてゐるその隅の方に動くものが眼にとまつた。……鳥籠の中に鳩が二羽、飼はれてゐるのだ。眺めてゐると小屋の若者がその鳩に餌をやりに來た。若者の何氣ない振舞ひも、可憐な鳩の姿に反映されてか、佛の化身かと思はれるほど慈悲に滿ちたものに見られた。

この鳩は藝術團一座の奇術になくてはならぬ役割をもつてゐるのである。

餘興の順序が進められて、いよ〳〵件の鳩が思ひもよらぬ瞬間に奇術師の腕によつて飛び出した刹那の皆の眼のおどろきは、鳩に集まる。

幕がおりるとその次に使はれる迄・鳩はまた籠の中へおし込められるのである

曲藝、萬歳・靈交術・奇術・魔術のいくつかが繰返されて 最後の幕がとぢられる頃、人々の胸に夢幻的な印影を投げ與へたであらう、あの可憐な鳩は、また急いで餌を拾はねばならなかつた。

さうした雰圍氣をふりかへつて見たとき 何もかもが川柳を物語つてくれるものゝやうに感じられた。

△

女・子供は自分で書いた繪や文字を人に見せることをひどく恥しがるものである。あれは己れの表現慾に對する技倆と構想の拙劣低級なことを卑下するのであ

らうと思ふが、それですら、さうした態度が純眞な何物かを投出してゐることに頭が下る。

藝術の道に精進せねばならぬと奮起する意氣と、藝術の道に何時迄も素人で恥しいと卑下する心持とが、ありたけの力で鎬を削つてくれることによつて、われ等は前進する。

△

ある夜川柳への思索と讀書に耽つてゐると、頭の上からがさッと落ちて來たものがある。神棚のお花の枯れた一葉であつた。自分の體にさはつたわけではないが その落ちた音で身に泌み込むやうな衝動を感じた。と共にゆるやかなユーモアが流れて來たのを覺えた。

夜更ししてゐると居眠りから眼をさました 妻が親切ごかしの苦言を浴びせてくれる 二の句には去年の入患を引つ張り出す。あの證據をつきつけられるとごうも餘り大きな顔が出來ない。妻にしたところが仕立物などで矢の催促を受けた場合には、夜の二時三時頃まで起きてゐるのだが、川柳にこると身體を惡くすると直感したものか 仲々やかましく忠言を試みてくれる。

こうなると自分の川柳に對する關心はとても自分の近邊にすらわかりつこない況んや他人にわかりやう筈があるまい。

勿論家庭の平和や經濟を無視し、打破して迄川柳に熱中するの愚を敢てする程の勇氣はないが、さりとてわれ〳〵の川柳に對する執心が如何に家庭や環境にはゞまれてゐるかについて風馬牛でありたくないと思ふ。所詮藝術の道は、その藝術に殉ずるほどの熱意が加はらなければ後の世の人々と語り合ふに至らぬことであらう。

低い〳〵、淺い〳〵道を歩んでゐる受難者の群をさびしむ。

默殺

—黃吻錄其四—

松丘町二

論ずべき內容を持たず、たゞへ主義主張らしいものが有つても、それに自信を持ち得ない人間が、他から呼びかけられた時、安全にして悧巧なる逃げ場に默殺なる言葉がある 自分達にとつて都合の惡い議論は、一切合財引つくるめて總てを默殺の二字で片付けて、平氣でゐられる人があつたら、私は何よりその神經の太さに呆れるだらう。

○

『番絡』十月號の卷頭言『默殺』を一讀した時、私はこの社の方々の、現在の川柳に安心しきつて、何等の惱みも抱かず、現在の境地に泰然と腰を下してゐられる態度を、その心境を、皮肉ではなく羨ましくさへ思つた。

畢竟『默殺』なる宣言も かうした心

境の一つの現れであらうことを思つて。

○

新興川柳　無産川柳の諤々たる川柳詩論に對して、傳統派の大家のうちで、小姑式の當てこすり以外に、眞正面から對等の太刀打をせられたことを、寡聞にして私は知らない。是は川柳壇にとつて寂しいことだ。

たんぽゝたんぽゝ砂濱に春が目をひらく　井泉水

この一句に天來の新境地を示顯して、俳壇の一角に旋風を卷き起した當時の井泉水氏の俳論に對して、傳統派の主盟虚子氏が、如何に傳統派の爲にそして又自己の信ずる藝術の爲に堂々の筆陣を張ることを辭さなかつたか！

子規の威大を以てしても、只默つてせつせと句作にのみ終始してゐたとしたらあれだけの仕事が成し遂げられたか否か議論の餘地はないことである。

○

併しながら私は、もとより柳壇の議論のみを好むものではないこと勿論である一首尾捉へどころなき斷片語、而も卑怯を以て色づけたる皮肉や、女のやうな當てこすり語の横行を不愉快に思ふ。

で、大衆とかへの鳴物入りの宣傳も結構であらう。お寺の説教のやうに、老人にも子供にもわからせやうとする川柳も大いに存在價値はあるであらう。只私は誇らかにも揚言せられたる『默殺』に對して　黄吻の愚を敢てしたまでゝある。無論默殺は覺悟である。

松山と路郎師

四國ケ生

僕は松山圖書館の歸りがけに新刊本などのある棚をのぞいてみた、こころがおもひがけない所にオレンヂ色に川柳漫談とよく廣告で見馴れた書體の本が眼にとまつた、すぐにあゝあの本かと直感した言ふまでもなくわが麻生路郎師の近著『川柳漫談』である、僕はにつこりした、丁度師に會つたやうな氣がして何んとなく懐しく思つた、一寸でも眼を通してみやうと思つて出して貰つた、表紙をあけると昭和四年十一月五日松山堂より購入と印がおしてある、三日前に備へつけたことがわかつた、『君も僕も死ぬ話』の文中路郎師の令息の死のあたりへ二ヶ所鉛筆で丸い印がつけてあつた、もう誰れか見た人があるなと思つた、

今年の二月松山に川柳雜誌社支部が設置せられ發會式には路郎干幹及び幹部同人の來松をみて以來我が松山の柳壇は大いに覺醒せられた、我々は我々の進むべき新しい川柳を考へるやうになつた。我が松山の柳壇は何んと言つても麻生路郎師におうところが偉大である。これは松山の川柳史に大書すべきことである、松山支部の十一月例會に出席しなかつて充

分知らないが出席した某君の話に何んでも沉く路郎師が來松せられる樣である。その時には松山の川柳家こぞつてこの偉大なる恩人を迎へることであらうと想像する、愉快なことである。

（十一月十日）

ひまな仕事から

—柘榴のこなご—

伊藤緑之助

ぢつと落ち着いてみたい。靜かに詩囊を絞つてみたい。—こうした念願はまづしい僕の腦裡にも堪ねず動いてゐる。

ひまはある。落ち着きにぢつとするひまはある。でゐて落ち着けぬ僕であるこれはひとり僕に限つたわけでもあるまいが……。

秋の夜更をほろ〳〵と鳴く虫のやうに靜寂の底こいつた落ち着き、或は砲彈煙雨の中に寸暇を得て尺八の奏ずるこいつたやうな、泰然たる落ち着きにも、限りない憧憬と魅惑を感じ、その陶醉境に想ひを馳せずには居られない。

× × ×

職掌上毎月三日位稅金徵收の爲村の部落へ出張する。持つて來る者はそう多くはないのだから、遊び半分こいつた方である、こいつて氣盡に音樂でもやるこいふわけにも行かず、烏鷺を戰はすわけのものでもない。又他の事務をやる程の殊勝な考へもなく、三百頁の書物を讀了する程のひまもない。人の來る合間々々雜誌でもめくるこか、小唄でも口ずさみながら外の雲行を見てゐる位なものである、だがこの日には、僕でもをかしい位落ち着いた氣分になりゆく自己を發見する（少くこも僕にはそう思はれる）人がない間はほんの一人ぼつちになり切る。そして机に端座してゐる僕である。

× × ×

S部落の出張所は純農の舊家である。庭園——そう廣いものではないが藪に續いてゐて、草のにほひ豐かな寂びがある。其處にはよく鷄が遊んでゐる。それも四五羽位なもので靜かに遊び戯れてゐる圖は正に一幅の景である。時には山吹がやさしく咲いてゐることもある。

山吹の明るさ鷄が來て座り　緑之助

片足を上げて鷄達の午后　同

げに平和そのものゝ靜をみる。この靜を傳へるのにこれ以上の言葉は無用であるこの靜の中に直面する自己を感謝する。湧然たる感激も和やかに美的興奮を禁じ得ない。

× × ×

C部落の出張所には近頃僕の感興を唆るものに柘榴が一本ある。この出張所は小寺院に接續した部落公會堂で、餘り廣くもない庭には柘榴の他松、柿、椎等點在してゐる。

柘榴は赤い果實を十個ばかりもつけて

少し黄ばんだ葉の色と相まつて相違なく秋を表示してゐる。

冬來りなば春は遠からじ、春の陽光蕩然として君臨せば、このさびしげな柘榴にも、生氣に充ちた新裝はなるであらう

その青さ、水々しさ　燃ゆるやうな綠

そうだ　綠は燃えてゐると言つても決して誇張な表現ではない。若葉は燃ゆるといふ言葉はよく使はれてゐるのを見る。併し思ふに燃ゆるといふ文字は全く亂用されてゐると言ふべきではなからうか。柘榴の綠は實際燃えてゐる。あの太陽に冴え返る葉の色には、觸れゝば熔かす息使ひを見る。

葉の青さ明るく柘榴陽に冴える　綠之助

そして更に精彩を添ゆるものにその花がある。

花には色々あらうが、此處に咲くのは朱の一重咲である。概して赤とか朱の色には輕い淫奔さと卑俗味があるやうに思ふが、柘榴の朱にはそれが些細もない。艶麗ではなく明るさがあり、快活さがある。その燦々たる朱の色は、精氣溢るゝばかりの葉とぴつたり呼吸を合してゐる

知らざりしかくもやさ柘榴咲く　綠之助

純情のあかさに燃ゆ咲く柘榴　同

柘榴と言へば

柘榴の實たゝれ切つた戀に似て　町二

空腹へ少し蕩立つ柘榴の實　綠之助

こうした秋の柘榴しか頭になかつた僕にとつて、初夏の柘榴は正に驚異的な發見である。若しこの柘榴が自家の庭にでもあつて、毎日見せられてゐるとしたらこれまでに感興を持たせてくれなかつたのかも知れない。だが毎月一回、ゆつくり柘榴と語り得るの一日を與へられることに依つて、僕には忘れ得ぬ親しい柘榴になつて了つた。

× × ×

今黄ばんだ柘榴をぢつと見てゐる。こんな親しい柘榴でも秋の姿には特別な感興はない。隣合つてゐる柿も同じことだ。

雨近くゆゝ、柘榴のものうげな綠之助

今手許にある飴ン坊氏編『新川柳一萬句』と三太郎氏編『新川柳大觀』とをひもといてみたが柘榴の句は遂に發見されない。柘榴の實の繪はよく見る。繪になる柘榴はあつても、句になる柘榴はないのか思ふとさびしくなつた。（一〇、二六稿）

自働車

桑港　伊藤神山人

數字の上から言つても米國の自動車は大したものだ、今年丈けでも製產高の豫算は五百萬臺以上だろふとの事米國全體の人口割りからすると六人に對する一臺宛當になるさうだ。

私等が自動車で一寸下町（商業區域）に行き用事を足さうとする、其の家の附近は勿論何處に行つても自動車が一ぱいである、

（三十七頁へ續く）

各地柳壇

川柳雜誌社 十一月例會

十一月二日夜　於端の坊

靜かな晩秋の一夜本社例會を開く、披講に先だつて「作句に苦しんだ時は何を目標とすべきか？　日常平凡な事件を川柳家は如何に見、それを如何に句材とすべきか？」について路郎先生から漫談的に有益なお話があつた。（二柳子記）

（參會者）路郎、紫電、鮎美、觀月、公二、里十九、柳影、英郎、かほる、喜由、灯舟、テルホ英賀夫、子其、大黃、沐天、與三郎、愚陀、千春、凡句郎、裸人、素郎、沒食子、芦都、龍甫石竹、豆秋、斗入、勇宗、苦香瓏、夕鐘、麓生新水、源坊、孤舟、突支坊、町二、碧水、嶺月、孿人、鶴峯、萬樂、楢雨、黑天子、一路、起照

二柳子　雨町

兼題　晝の酒　路郎選

相談にのつてもくれぬ晝の酒　公二

晝の酒子は泥足で戻つて來　鶴峯

晝の酒ひとりで呑むは惱んでゐ　柳影

晝の酒下戸我がからだ持て餘し　麓生

晝の酒晩のシキセを聞かれてる　突支坊

晝の酒いつか手酌になつて居り　英郎

又一人呑連が來た晝の酒　雨町

返濟の目當も出來て晝の酒　テルホ

晝の酒女房の腕も褒めて飲み　黑天子

晝の酒もう拂へない腹を決め　灯舟

物賣をなぶつてみてる晝の酒　碧水

波高く風强くして晝の酒　觀月

意見して飲ましてやつた晝の酒　裸人

晝の酒レインコートを脱ぐとする　亂耽

晝の酒女房きまらぬ酌をする　沐天

晝の酒やたら仕事が大き過ぎ　楢雨

溜息が出てから苦い晝の酒　町二

晝の酒豫定をみんなわすれさせ　沒食子

身につくと云はれ五勺の晝の酒　石竹

結納をきつちり交し晝の酒　喜由

晝の酒水屋の前で呑んでゐる　壽枝女

晝の酒子供が前に來て座り　同

父と子と醉ふてしもふた晝の酒　鮎美

植木屋に指圖をしてる晝の酒　同

晝の酒割合よわい國の父　嶺月

晝の酒女氣のない家になり　同

こゝろうつ陽はあか〳〵と酒をのむ　愚陀

初めから醉はぬつもりの晝の酒　同

晝の酒ガギヤー〳〵を聞きながら　萬樂

子を貰ふ話夫婦の晝の酒　同

晝の酒世間へ濟まぬ程に醉ひ　同

晝の酒阿部野橋から別れたり　かほる

晝の酒仲居に成つてつぎに來る　同

商賣の話になつた晝の酒　同

（人）晝の酒子供へ靴も買ふてやり　黑天子

（人）死顏を殘して晝の酒になり　鮎美

（人）晝の酒また一錢の客に立ち　苦香瓏

（地）晝の酒ふすまあけると猫が居る　亂耽

（地）晝の酒不治の病の妻と居る　孤舟

（天）なすこせずうつぼつと晝の酒　京郎

（軸）晝の酒自然へ一指だも觸れず　路郎

席題　宵　孿人選

花街の宵町方は夜更けなり　起照

お米屋は暗く宵から閉めてゐる　大黃

宵闇が迫つたやうにバー淋れ　麓生

愛し合ふやうになつたもこんな宵　雨町

宵からの客をもてなし兼ねてゐる　新水

噴水の白さへ宵の風重く　楢雨

「宵のげん」とう〳〵靴を脱がされ　豆秋

戀人を待つてる宵の灯が眠し　孤舟

あくびして梳子が通る宵の町　かほる

二人きりの話宵からまだ續き　凡句郎

まだ宵の人出道頓堀の靄　素郎

宵近く白熱化した補回戦　灯舟
電報と宵闇せまる中に立ち嶺月
電燈を低う降して宵を締め萬樂
宿闇のうつかり踏んだ水溜り苦香瓏
暮れかけた道頓堀の下駄の音愚陀
日曜は晴れる今宵へ月が出る勇宗
宵のうちに本讀んでたのがなかし路郎
百人一首まだ宵と云ふ聲で讀み公二
縫ひ物と讀書愛の巣宵の口同
故里を今宵限りのなつかしさ子其
宵の路女の顔が浮いて見え同
宵の内子供の客が來る夜店英賀夫
ふところヰ廓の宵を通りぬけ同
宵から寢つゞけ病床靜かなり沒食子
せがまれて宵の夜店へ連れてくる同
(佳)出戻つてさびしき宵が續く鮎美
(佳)戀に破れて宵を出てゆく同
(佳)宵闇の泉水鯉のはれた音苦香瓏
(佳)シゲキ求めて宵の灯へ泳ぎテルホ
(佳)宵闇をまつすぐに行く郵便屋かほる
(佳)宵のうちには妬く氣もなかに路郎
(佳)ふいと出て宵を嬉しい人に逢ひ町二
(佳)秋の宵しんみり酒が齒にしみる同
(軸)淋しさは一人の宵へ雨の音琴人

席題　獵　町　二選

きまぐれな銃に打たれる鴨が居ず孤舟
獵の他は何も出來ない犬を飼ひ裸人
禁獵池一群下りたらしい音公二
獵犬の今にも駈けて行きそうな雨町
獵歸り去年の茶店で休むなり夕鐘
雉子一羽打つて夜店を通つて居芦都

獵犬の眼に腑甲斐ない銃を提げ萬樂
獵裝の姿は淋しく一羽だけ突支坊
戀人へ御馳走すると獵に出で新水
鴨賣つてゐる店を聞く獵歸り大黄
獵人のふと淋しさに空をうち沐天
獵犬の尾の動き何かゞ居るらしい楠雨
疳癪を棄てんかな獵銃の重さかな路郎
子を連れて垣根越しなる空氣銃石竹
獵犬をなだめるだけに困りはて同
三人が鴨一羽にて歸つて來鶴峯
獵に行く途中電車で連れが出來同
獵人のうつかり踏んだ禁獵區苦香瓏
銃音に一直線に笹がゆれ同
ゲートルが少しゆるんだ打ちそんじ琴人
禁獵區鳥不意打に會つてゐる同
充分の自信で除隊獵に出で碧水
獵歸りだまつて腰の獲物見せ同
姙娠の妻に獵行留められる同
獵銃の手入れに明日の日を想ひ源坊
獵姿遠く初發の煙を見る同
獵犬の息へ淀川明けかゝり同
(佳)汽車にのつて雀をうちに豆秋
(佳)鶯獵へ時々風の音がする孤舟
(佳)銃先の原始を見たり柿の色路郎

席題　押　入　かほる　選

子が一年と言ふ押入の落書勇宗
押入れの音は次男のカメラ熱源坊
押入の棚も家主へたのんどき豆秋
押入れに押されたやうに寢ぐるしく路郎
母が來て押入掃除して貰らい孤舟
押入れのこんな所に穴があき苦香瓏

段ばしを押入れに見る國の母石竹
押入れの前で下女の思案なり里十九
すいて居る押入もよし新世帶琴人
珍客の數に押入開けに立ち嶺月
押入れをあけると猫が不意に出る鮎美
押入が足らぬか行李椽へ置き麓生
一泊の客に押入用があり英郎
押入れの上に裸体の額があり裸人
押入の隅へ行季は押込まれ琴人
押入を開けて紋付出してくる觀月
押入によう探さずに叱られる新水
押入れは今日冬物を入れ替へる同
押入れに或る日仔猫がかしこまり沐天
押入をあけて鏡に向つてる千春
押入へ母親をつとかくれて見同
押入れをあけると猫の居る生活愚陀
押入れも閉めず出でゆく獨り身の同
押入に酒の香がするひとり者町二
押入の婦人雜誌に妻がゐた同
(人)よそ行に下女押入れの音を立て新水
(地)客を立たせて押入れの中を見る二柳子
(天)よい夜具を買ふて押入せまいなる子其
(軸)附け貸しの外に押入を嬉しがりかほる

席題　面　當　て　嶺　月　選

面當ての寄附とも見える金の嵩路郎
面當てに一升瓶を提げて來る觀月
面當てにこうもしたいが金がなし起照
面當の手紙符箋で戻つて來テルホ素郎
面當ての樣な丸髷結ふて居る鮎美
面當にやつてこませと念をいれ芦都
面當に死んだ娘の年を繰り

面當を鼻で笑つて酌いでくれ　苔香龍
面當のやうに他國で嫁をとり　石竹
面當てをやさしゆうみせた里の母　里十九
重役へむやみにひゞく勞働歌　孤舟
面當てにした狂言へ目が光り　突支坊
新聞は無料ですかと書いて貼り　源坊
面當ての樣に辭表を叩きつけ　鶴峯
面當ても愚痴から先に出る女　凡句郎
面當てに彈く三味線の糸が切れ　同
面當てのいきなり起き風呂へ行き　町二
婉曲な面當てへ泣く嫁にして　同
（人）面當てがこたえぬ事は分さ居　素郎
（地）面當ての樣に嫂思ふて居　新水
（天）面當てもそれから先が案じられ　路郎
（軸）面當てのつもり骨折り損となり　嶺月

選

席題　女　互

見切品さても女の手と手と手　萬樂
何んでもない事に涙の出る女　鶴峯
嬌風會女のやうな聲を出し　豆秋
退院の近く女の女めき　沐天
女には惜しい頭の好さを譽め　碧水
輕業のやうな女に戀があり　一路
灯の明さ帶の赤さよ女連れ　愚陀
ほしかつた柄を話して女連れ　子其
母親へ襟をあはすも女なり　鮎美
白粉をとく手に女秋を知り　町二
美しい女女をふりかへり　琴人

選

席題　人格　互

今さらに天坪棒も握られず　源坊
人格に申し分もなし金もなし　沒食子
髯のある方へ赤帽寄つてゆき　孤舟
洗默にその人格を見せて居る　英賀夫
一目見て西郷さんと判るなり　石竹
人格をぜにゝしてまで儲けてる　千春
人格があつて長屋を代表し　公二
人格を貧しう保つ漢學者　子其
三面へその人格の裏がのり　愚陀
人格のなんのかんのと洗濯屋　柳影
人格をみさめて貰ふ膝を折り　紫電
人格を無視されてゐて喋べつて居　路郎
お手許拜見と人格を云々し　同

雜誌社　川柳　藤島茶六氏歡迎會

十一月十三日夜　於道頓堀かき彌

川柳行脚に西下の東京すゞめ吟社の藤島茶六氏を迎へて一夕の歡を俱にする。主として本社同人社友の集りで、茶六氏の旅情を慰むると共に稗益する所が多かつた。（ひろし記）

（參會者）茶六氏、路郎、光路、三笑、かほる、亂耽、愚陀、里十九、雨町、悟郎、琴人、たけし、汀柳、弘行、雨迷、六浦、萬よし、普門、ひろし

席題　冬　路郎選

老夫婦炬燵の事で少しもめ　里十九
一人者冬の心になつて寢る　愚陀
相寄りて冬の日射を抱くといふ　雨迷
夏秋冬と來るものゝ　悟郎
御隱居は半分寒く小言云ひ　琴人
冬の夜を眞綿一枚着せて出し　普門
冬の陽のやさしい光り窓を開け　同
しよんぼりと冬の陽ざしに淋しい子　雨町
ポプラみな裸になつた冬景色　同
冬の夜に女一人と思はれず　三笑
行くことはないではないが冬の雨　同
灯をうつす川面に冬の深さみる　汀柳
足音をコト〳〵冬に從へり　同
戸をたてにたてば夜更けの冬の色　ひろし
そびえたつ山から冬は降りてくる　同
今年もうもりみを貰ふようになり　かほる
冬が來て今さらに見る二枚折　同
冬の部屋息子が立てば背が高し　同
何か鋭きものを求めて冬に生き　亂耽
まんまるく冬を默つて坐る戀　同
驛の時計のしら〴〵と冬　同
天井へ心の通ふ冬の風　茶六
母と子の世帶へ早く冬となり　同
つまづけば冬のこゝろのあからさま　同
（軸）冬は尖つて金のことい ふ　路郎

席題　旅　茶六選

暫くは旅を忘れた虫を聞き　萬よし
こゝも又思つた程のとこで無し　かほる
旅にゐて川の流れを懷しむ　愚陀
旅の朝方角を知る陽を拜み　普門
民政だ政友等と女中迄　悟郎
旅なれてところの唄をきゝ覺え　ひろし
妻の顏子の顏雨の宿籠り　同
三等の隅で日記など出してゐる　里十九
旅先きの今日一寸した戀もあり　同
旅といふ心へ泌みる酒の味　琴人
寢しづまる旅の枕に家の事　同
一人旅流れるやうに立つてゆく　路郎
（客）こゝろよきため息宿の膳に　同
（同）旅愁はるかに故郷へ雲の飛ぶ　愚陀

（同）秋の旅人となり酒酌める　雨迷
（同）旅の朝はつきり一人者と知る　亂耽
（同）吊皮に宿の不躾さを思ひ　同
（人）ヂレットに宿の鏡のくもるなり　三笑
（地）朝霧の中を出て來た旅の人　路郎
（天）くたびれた宿にユーモラスな女　雨町
（軸）旅にゐる心はるかに水の音　茶六

川柳雜誌社松山支部 **第九回例會（松山）** 岩本素人報

兼題　緊縮　水樹選

緊縮の聲ほどにないデパート　巨城
緊縮と言ふ折詰へ舌皷　素泉
緊縮と言ふに藝者の箱は切れ　句浪人
緊縮も程度によると女給言ひ　葭一郎
一も二も緊縮振りを見せる妻　落伍人
毛の首卷を緊縮振り返り　曉柳
緊縮を梧に會計意地を張り　柳女
緊縮を餘所に娘の髮が結え　川の字
緊縮がボーナスまでに響いて來　支々子
緊縮に父の遺品を着る手織　青帆
緊縮に初めて氣附くこんな無駄　大樓
（佳）緊縮の譯を妻は背へ聞き　斜松樓
（佳）緊縮に親父我意を得たりけり　流矢
（佳）緊縮へ子供の服は別な錢　雨眠
（佳）測量の杭緊縮のあからさま　拓水
（佳）緊縮は承知の上のやけつ酒　紫石
（佳）緊縮も第二期に入り薄氷　素人
（佳）緊縮と別にお米の値が上り　同
（人）家計簿を中に緊縮愚痴になり　五健
（地）大火鉢緊縮振りの炭を埋め　雨眠
（天）緊縮で下女大臣の名を覺へ　雨桂
（軸）緊縮へ幹事の苦心思ひやり　水樹

兼題　減俸　五健選

減俸の聲で志願の減る官吏　川の字
減俸案與論は遂にもみつぶし　極光
裏長屋減俸談へ水を向け　葭一路
減俸の月から養鷄思ひ立ち　拓水
減俸は當り前だと土を堀り　句浪人
減俸へ自分の趣味を一つ捨て　雨眠
減俸の代りに强制貯金なり　支々子
減俸をせゝら笑ひの柴つ葉服　紫石
減俸を申出てから名市長　青帆
減俸をされる俸給羨まれ　大鷲
減俸の噂ストープを圍み　素人
減俸はせぬがボーナス外れ相　松葉
（佳）減俸の事は知らずにゐる雀　武子
（佳）減俸撤回誘への服が出來　巨城
（佳）減俸の先づ廳内へ指を折り　水樹
（佳）減俸の事で收入あぢかれる　同
（佳）減俸に官吏も只の人と知れ　大樓
（佳）減俸の程度にならぬ俺の腕　斜松樓
（佳）減俸の譯を女房に憤慨し　流矢
（軸）減俸にあわれ男の意地もなし　五健

席題　袷　大樓選

丸洗する袷へ母の愚痴　夢鄕
酷寒に袷ですます若い者　支々子
謎子まだ袷着て居る十二月　斜松樓
黑朱子は袷の衿へ紙を見せ　雨眠
黑衿の袷に似合ふ太い髷　双葉
臺所へ來て絹袷間に合はず　柳女
浴衣あり袷も見へる紹介所　川の字
袷着た妹急に大人ぶり　青帆
手内職やぶれた袷の裏が見へ　巨城
浴衣から袷になると肩が凝り　松葉
袷着て家出した子を思ひ出し　素泉
病上り少し早い袷を着　大鷲
衿付きの袷にそれとうなづかれ　句浪人
（人）ホームシックの袷の頃となり　素人
（地）不審打つ袷に春の酒のしみ　五健
（天）結ひ立てを尙引立てる初袷　水樹
（軸）初袷衿かき合はす朝の冷へ　大樓

兼題　耳搔　素人選

耳搔きを終へて散髮屋は起し　極光
耳搔きは見へず小指はもの足らず　双葉
耳搔が大きな口でのぞきこみ　拓水
耳搔いて親辭聞いてる尙齒會　斜松樓
耳搔の手が震へてる許嫁　玄々子
耳搔を使つてる口開いてゐる　巨城
無理を聞く仲居思はず耳を搔き　大樓
耳かきにさんごの珠が邪魔になり　句浪人
耳搔を何するつもりタイピスト　武子
耳搔を急に奥まで突こまれ　春峰
ペン軸が耳搔となる閑な椅子　五健
耳搔へ顏半分を傾けて　雨眠
よち〳〵と來るへ耳かき向をかえ　水樹
來て居らぬ言へと耳搔く膝枕　青帆
應接間煙草もあいて耳を搔き　大鷲

席題　狸　互選

一升の飯をペロリと狸つき　素人
三味線の狸は妙に同情し　一止
まわし部屋狸寢入りの耳を立て　句浪人
油揚げ持つて狸へ「お」を付ける　曉柳

時雨月狸の樣なものに遇ひ　五健
狸寢入り母は蒲團を重れかけ　斜松樓
首に卷く狸の皮へ犬が吠へ　青帆
山住い狸の聲も聞き覺へ　武子
鬼格子狸体よく軒へ据へ　柳女
豆狸化しそこれてぞソをかき　玄々子
こわくない狸を檻の外で見る　双葉
狸見てこれが化かすのかと思ひ　松樓
夜の道狸の事も母は言ひ　春泉
首卷きにいゝわと狸威かされ　夢郷
星明り狸巨人の如く見せ　大峰
野道になるとソラ狸がと威し　大鷺
三味線を聞く狸寢の膝枕　拓水
夜の長さ狸の話けりつかず　素葉

川柳雑誌社　**糸屋町同人句會**（大阪）

十一月十五日夜　於實業會館　川合舟々報

兼題　毒婦　毒婦　毒仙　選

さなくとも妖婦と云ふが醉ひ初め　舟々
毒婦また今日も一本注射する　卯三
毒婦とはなつて後妻の孕むなり　新水
本心にかへれば毒婦酒を飲み　赤城
長唄の中に毒婦のつゝましく　双葉子
火を吐かん毒婦の口のチトゆがみ　蒼梧樓
（軸）毒婦今爪の化粧に餘念なし　毒仙

席題　冬　双葉子　選

出稼ぎのまた雪國を後にする　翠峯
信心をすべりこかした今朝の凍　毒仙
あこがれの都にせめて春を待ち　新水
此の上に貸しては呉れず冬は來る　テルホ
眞先きに冬が訪れる穩居所　卯三
正月が目にちらついて儲からず　キン三
父がする咳と一しよに冬に入り　同
北へ曲ればズボンへしみる風　蒼梧樓
觸るゝ音みな憂然と鳴るも冬　同
（軸）盜難を屆けて朝のひえを知る　双葉子

席題　乘合　互選

乘合の話しこゝらでよく轢れ　毒仙
乘合の車掌英語をよくつかひ　キン三
微苦笑となりぬ乘合跳れ上り　蒼梧樓
乘合の國を聞かれてからあはて　赤城
結ひ立ての一人乘合こばむなり　双葉子
乘合のあると聞いたが遠いなり　舟々
乘合のまだ〳〵ゆれる道へ來る　翠峯
乘合の行くも歸へるも故障なり　新水
送られつ送る二人へバスはゆれ　テルホ

川柳雑誌社　**加古川支部小集**（兵庫縣）

十月二十日　於桐郎居　水田　桐郎報

席題　泣、靜

泣いてゐるその襟足の魅惑　桐郎
悲しさを堪えきれずに露路へ出る　五彩果
氣性の強い兒程泣きじやくり　川尻
氷割る影を圍んで虫が鳴く　五彩果
鼠の音もせず留守居怖ふなり　桐郎
もう一時この色街も靜かなり　みや子
叱られた當座は一寸靜かにし　改發

川柳雑誌社　天滿支部　**天滿宮秋祭句會**（大阪）

十月廿五日　北山悟郎報

友情　琴人選

友情を母に語れば母も泣き　靖弘
友達の氷枕を替へに立ち　悟郎
友情にすがり保險を勸めてる　千春
心配な肩親友に叩かれる　孤舟
出征に氣強い友の聲を聞き　同
親友は叱つて家へ連れて去に　同
（人）出稼ぎへ又繪葉書を呉れる友　同
（地）友情は故人を偲ぶ追悼會　千春
（天）友情の白々しくもぼけて來る　悟郎
（軸）友情へ縋られる身も困つて居　琴人

柿　靖弘選

寢返りを打つ病人へ柿が落ち　孤舟
柿一つ〳〵へ落ちる陽が光り　同
柿をむくナイフ冷たく夜の更け　同
澁そうな柿一寸見なめて見る　千春
喰ひさしの柿も一緒に軒に吊る　同
澁柿が殘つて今日も暮れる山　聞路
なれ〳〵しくもポーイ柿を取り　悟郎
（軸）柿の皮むいて女給の手が疲れ　靖弘

三世相　悟郎選

我が運を三世相に賴り過ぎ　靖弘
祖父の云ふ事と合ふてる三世相　孤舟
三世相大きく孫の手に抱かれ　十字路
三世相自分の相が見付からず　聞路
よい方に判斷をして三世相　同
笑はれる母三世相未だ信じ　琴人
三並相合性のとこ虫が食ひ　同
（軸）三世相和蘭國の事も書き　悟郎

人いきれ　十字路選

人いきれ妻はこめかみ押さへてる　千春

人いきれ女一人の席が空き　悟郎
人いきれ女の柔い手がさはり　靖弘
香水の香ひが届く人いきれ　聞路
人いきれ雨の電車へゆれて立ち　琴人
香水がもみくちやにされ人いきれ　同
花形が今踊つてる人いきれ　孤舟
人いきれ汗が滲んだプログラム　同

紅葉　孤舟選

紅葉狩フト大阪を思ふ夜　靖弘
中折へ紅葉を折つて少し酔ひ　聞路
紅葉すれ共今年の不作　悟郎
堂守へ感興も無し紅葉する　同
紅葉手に〳〵女も交り　悟郎
紅葉が散つてやりくりも押つまり　琴人
染めて来た山の紅葉へ寒う住み　同
参詣は序の様に紅葉へ来　同
(軸)紅葉を忘れて二人酔うて居る　孤舟

高下駄　聞路選

難かしく二階を降りる高下駄　十字路
高下駄で日和を歸へる交換手　千春
高下駄の形はつきりリノリユーム　悟郎
高下駄へ天氣になつた傘を持ち　琴人
高下駄へハツキリ見せた足の癖　同
高下駄でうどん一つが届くなり　靖弘
留守を頼んで高下駄出て行く　同
タクシーをよけて高下駄倒れか　孤舟
高下駄へ間抜けた様に陽が當り　同
徴造りへ来て高下駄は邪魔がられ　同
(軸)高下駄で連れの一人は雨に立ち　聞路

川柳雑誌社 簸川支部茸狩句艸（島根縣）

十月十七日　於保知石山

伊藤　綠之助報

兼題　愉快　濁涙、枯楓共選

デカンショが揃ひ宴會午前二時　綠之助
連れて來た犬も愉快に跳ねてゐる　かず子
いゝ氣分暢樂園にせまる闇　枯楓
愉快さの下默を鳴らして子が戻り　翠竹
空想の明日の愉快さ雨になり　専路

席題　茸狩雜觀　互選

毒茸と聞いていま〳〵しく捨てる　綠之助
見つからぬ茸へあせれば轉げかけ　専路
失望の眼へ毒茸ぬつと生え　翠竹
探し出す茸一本に疲れ果て　枯楓
茸狩へ女はころげまい苦心　同

席題　暢樂園　綠之助選

暢樂園望めば銀波ゆれてゐる　専路
大社何處指さす方に大鳥居　翠竹
いゝ月夜暢樂園の松が澄み　枯楓
暢樂園捜査本部のやうに來る　濁涙
めい〳〵に家を指さす暢樂園　同

席題　裏　専路、翠竹共選

裏通りすればやつぱり元の道　かず子
裏通りモガに後を振り向かれ　専路
汗ばんだ上衣の裏へつく模様　枯楓
唯一人裏切者の子が遊び　濁涙
舞臺裏客さは別な氣で見てる　綠之助
裏切つた罪におのゝく秋の月　同

川柳雑誌社 梅田支部句會（大阪）

水谷鮎美報

題　石橋　かほる選

石橋のまあまんなかに犬が寢て　里十九
石橋をあづかるように乞食ゐる　嘉一
石橋のうへから見れば鯉がはね　鮎美
歸郷して
石橋の昔のまゝもなつかしく　夕鐘
石橋へ娘を送る里の母　美芳
失職の影が石橋からうつり　観月
石橋を渡れば鳥居見へてゐる　同
(人)石橋へもみぢの枝がさがるな　鮎美
(地)石橋の方へ蝶々は飛んでゆき　同
(天)石橋を包んでしもた今朝の雪　夕鐘
(軸)石橋に竹がつツ張るさんぼそり　かほる

題　十二月　新水選

十二月粉炭さらへて手をあぶり　鮎美
十二月田舍にゐたい氣にもなり　夕鐘
羽子板に手垢のついた十二月　同
十二月夜寒の音も更けて聞き　美芳
十二月なにするともなし暮れ　味空露
十二月はや嬉しさに羽根をつき　嘉一
せきこんでまとまりつかぬ十二月　健坊
十二月別莊からの囀の音　同
十二月丁稚叱られどうしなり　観月
洋傘をさげて出てゆく十二月　同
(人)お産した妻もやつれて十二月　健坊
(地)鬼になることも知つて十二月　夕鐘
(天)十二月みな考へてゐる姿　観月
(軸)十二月火鉢かゝへる暇もなし　新水

題　幕間　かほる　選

幕間に思ひがけない人に會ひ　嘉一
幕間に誰かが俺を呼んでゐる　觀・月
幕間を待つてるような化粧室　美芳
幕間に一べんうちへ電話する　夕鐘
幕になり外はとつぷり暮れてゐる　同
幕間に辨當開く慰安會　健坊
幕間を男衆如才なく廻り　里十九
幕間に一べん樂屋見とうなり　同
幕間を女將と歩く棧敷裏　鮎美
開幕のべるが出雲屋まで聞へ　同
(人)江戸ッ兒と座りあはせてうれしが　夕鐘
(地)幕間に嫁をもらへとすゝめられ　觀月
(天)幕間にハンカチなんぞ買に出る　里十九
(軸)幕間に又あの人が當るなり　かほる

川柳雜誌社支部別府部　**湯苔吟社**（別府）

十一月　小川三猿堂報

題　妙藥、高島田、普通、ぜんざい　鮎美　選

妙藥の多いに迷ふ　永やまひ　葭村
田舍から家傳妙藥も届いて居　流舟
妙やくはなにかくろやきらしいな　晃卓
ながたびへ持病のめう藥母がだし　突如
だまされるきで妙やくと云ふをひ　夏宵
つみぐさのおきな妙藥ひめてゐる　劍阿彌
洋髪のくせのなほつてる高しまだ　詩津女
高しまだ俯むいたまゝお茶を出し　葭村
高しまだなはのれんがじやまになる　更生
久しぶりうばをたずねる高しまだ　晃卓
親のきはあれでふつうの樣に言ひ　豊泉
ふつうよりおそい一人かけ、ゆき　對馬
間違がなくてふつうの眼で見られ　晃卓
ぜんざい屋まこをつれた客もゐる　對馬
ぜんざいのあぢをほめてる主婦さん　雨灯
ぜんざいの寶聲さむうろぢに入り　夏宵
ぜんざいがすきなむす子で無難なり　晃卓
ぜんざいへ上戸つきあひかれてゐる　同

題　道、本箱、さんぼ　素人　選

道普請さな隣りもやつぱり女が出　夏宵
みちぶしんもできて鎭守の祭なり　流舟
赤道のましたに住んで生けるもの　三猿堂
縣道が雨でくずれて車止め　對馬
近みちはみはらしもなく坂になり　雨灯
よむのではなくて圓本ふえてくる　豊泉
本箱をせにして寫眞よくうつり　夏宵
思ひだしたやうにとんぼはむきなかれ　三猿堂
なまゐるい風にとんぼは辻へ集り　大路
つりいとをそしらぬかほでとんぼゆき　幼草

題　港、聲　互　選

あめあがり港一めんの帆をひろげ　豊泉
この俺も港も街もものまゝ　突如
カンテラのさびたくゆれる夜の港　對馬
宵ながら港の街のさんざめき　晃卓
りつぷくをなだめてかゝる涙聲　同
重役は重役らしい聲をだし　三猿堂
わが妻も老ひたり聲に年が見え　夏宵
秋祭すんで添ふ日も近づけり　讃昌
踏切で見る提灯は秋祭　玉涙
秋祭子は滿腹に寢てしまひ　赤城
空瓶を畔に殘した秋祭　同
御馳走が明日まで殘る秋祭　流星
秋祭寺は生花會をやり　同
秋祭羽織着たのが痩せてゐる　新水
連れられし母の里なる秋祭　同
赤トンボ舞つてゐるのか秋祭　同
姉妹の婿が揃ふた秋祭　舟々
祭提灯の横に稔り　同
呑み明す用意の出來た秋祭　同
秋祭稻穗はみんな垂れてゐる　京郎
鉢卷の寒そうにゐる秋祭　同
秋祭案山子に酒落る上機嫌　同

川柳雜誌社　**加古川支部例會**（兵庫縣）

十一月五日　水田桐郎報

兼題　集金

集金にコトリともさせず便所に居　尾秋
晩に來て臭れを聞き流して表へ出　同
返事して手をついて見ると集金人　みや子
若旦那の集金一向はかどらず　同
集金人ついでに値段聞いてゆき　五彩果
集金人錢と云ふ字がさびて來る　同
集金の小僧あつさり歸へされる　泰山
集金に丁寧すぎる禮をされ　同
集金の目に上燗屋湯氣をあげ　桐郎
花の留守集金人の目に埃　同
集金へ釣瓶落しに暮れかゝり　同

兼題　秋　祭　互　選

席上　酒

日曜の午后へ一升さげて來る　五彩果
千鳥足　隣りの迷惑考へず　みや子
むつかしい話は飲んでから　頼み　泰山
よい氣持ち酒と一緒に歩いてる　同
上燗の湯氣に財布を握りしめ　同
唄はない前に盃冷えてゐる　桐耶
晩酌は忘れる程の酒であり　同
晩酌が樂しみ小使老けてゆき　尾秋

川柳雑誌社　**御旅支部例會**（大阪）

十一月十日於市立東市民館　櫻井圓角報

兼題　水　路耶　選

雨だれの桃割れに落ちる一雫　はる子
下戸の目に何が甘露か同じ水　沙洞
不景氣を水商賣は鵜呑みにし　路烏
毒となり藥ともなる水の味　荷月
茶碗に汲めば水丸くなり　柳南
水道へバケツ八ッは騒々し　同
豆腐屋は水につかつたつりを出し　房仙
祖母の鼻水にも秋の來た感じ　同
水車蹈んでも夫婦仲はよし　ちとせ
水あそびさせてしまいに叱つてる　同
水道の出る間にと女房汗をかき　同
鴛鴦の揃ふて波を引く靜かさ　圓角
シャボン玉拵へてやつて吹いて見る　同
もう牛も勞を稿ふ川へ入れ　同
大阪の道と思へぬ水溜り　翠夢
悠久と流れる水に思へらく　同
打水の加減あるじの偲ばれて　同
カフェーで水の注文してるなり　同
水遊び親も仲間に入る若さ　多耶
水向けられて居て知らぬ坊ちやん　同
水引の懸けかたで知る理事の妻　同
あり餘る水にも金をかけてのみ　同
（人）娘ウツカリレターを水にとられ　はる子
（人）水仕事女中に代る氣になれず　ちとせ
（人）信心へ氷を破つて手を洗ひ　圓角
（地）昔をいはず子をせなで水を汲み　同
（地）この谷の水がベニスへ續く水　沙水
（天）豆腐屋は冷い樣な顔もせず　柳南

兼題　酒　路耶　選

結局は折合ついて酒になり　飛佐志
酒の場の成つた話へけちなつけ　天仰
酒さめて打明け話し氣にかゝり　ちとせ
酔つてゐるよ叱らずに許してよ　多耶
あの人を口説いて見たい酒機嫌　飛佐志
（人）カクテルのグラスへ春の憂欝　翠夢
（地）お父の酔ふた眞似して遊んでる　圓角
（天）皆酒のせいにして置きやそれでよし　沙洞

席題　諦め　路耶　選

淋しくて諦めきれぬあの寫眞　碌々子
諦らめましただけでは親父承知せず　多耶
去りし妻の噂に胸をさゞろかし　飛佐志
定命と諦めて扨醫者を撰り　荷月
一足であきらめられぬ後手を打ち　翠夢
一ようさは諦められぬ劫の負　源氏
諦めて交通巡査となりにけり　同
半生も過ぎたと希望捨てゝ立ち　圓角
諦めた蛍は早く高くとび　同
運と諦めたとて又愚痴り　路烏
もう泣くなと輕くたゝかれ頼もし　同
（人）諦めのつかぬはあれの置手紙　碌々子
（地）あきらめに似た淋しさに家出る　翠夢
（天）諦めよと云へば鳴咽がハンカチ　路烏
（軸）あきらめてと思ふに死を選び　路耶
（軸）母の子に違ひないがアナキスト　同

席題　世の中　路耶　選

世の中は悪が強いと一人きめ　源氏
萬邊なく陽は世の中に輝くに　翠夢
搦手を上手に攻めて別莊建ち　多耶
無産者の油と汗も食ふに足る　飛佐志
お互に蚤追ふ努力で進まうよ　荷月
世の中はなんのかんのと子を殖し　同
その事に確信もない道をゆき　路烏
累卵の遊びと人は氣がつかず　同
（人）世の移りを嘆くも見る樂隠居　同
（地）人の事氣にせぬ心子に困り　圓角
（天）世の中を切り離しての話です　多耶
（軸）世の中を巡査になつてもてあま　路耶
（軸）それが世の中ですとけちなこと　同

回覧互選句報（近江）

十一月十五日　若井たけし報

題　娘、俄雨、顔、電車、紙屑

世はさまゝ電車を降りる　たけし
單線の電車不便なとこで降り　東新丸
孝行な娘淋しく笑ふのみ　潮多浪
緊縮は私きらひと娘云ひ　光菊
俄雨歸へる時間が氣にかゝり　東新丸
紙屑屋のつそり立つて怪しまれ　潮多浪
朝寒の紙屑の色白く　たけし

割算になつて紙屑屋は困り　内匠守
プロマイド素顔も入れて一揃ひ　同
横顔の淋しさに云ひ得ず　たけし

黄蛾居偶會（大阪）

十月十二日夜　熊本黄蛾報

綻び　互選

綻びをつまみ縫する一人者　蝴蝶
綻びの小供に糸を通させる　青果
綜びを見付けて呉れるも女房　助六
ほころびたままで丁稚の夜が明ける　彩秋
おちついた宿で綻び縫ふてゐる　公二
綻びをひとり身知らぬにはあらず　同
綻びを縫ふばつかりで緣が無し　松郎
綻びに流石は母の手が馴れて　同

兼題　冬仕度　松郎選

内職に冬の仕度が未だ出來ず　彩秋
藁灰も出來て火鉢を揃へてゐ　二柳子
張り板の近所に早い冬仕度　公二
思いやりある丹前を縫つてゐる　同
母と姉いびきの中に冬仕度　助六
(人)冬仕度しろとばかりの呉服店　峰嵐
(地)冬仕度納屋一ぱいに薪を積み　彩秋
(天)冬仕度おなじところが綻びて　黄蛾
(軸)冬の仕度に拂ふてかゝるなり　松郎
冬仕度しつゝ持病へ氣を配り　同
冬仕度ハハハと酒臭い息　同

席題　全快　互選

全快の手づから上げた御神燈　青果
全快を祈る夜中の水の音　峯嵐
床屋を出て全快のうらゝかさ　彩秋
全快の目にそうぞしい交叉點　黄蛾
全快をして太陽に背なかをむけ　同

席題　他家　互選

他家の事ばかりで顔が賣れて行き　彩秋
他家さんのものばつかりを縫ふてる　黄蛾
他家さんの飯で大きふなつて來る　同

兼題　旅　彩秋選

西國の旅に喜樂な老夫婦　青果
お上りは無暗に歩く旅にして　峰嵐
バスケットで行く姉の旅仕度　二柳子
六十の坂を逢若な旅の宿　助六

名賀壽川柳句會（尼崎）

十月十六日　於大物町圓平寺今井吉朗報

席題　舛　互選

端に寢て舛の辯をいひそへる　水府
惡戯の舛を笑ふ針仕事　萬樂
團体の舛になつて外は更け　陽喜亭

席題　肩　陽喜亭選

(佳)肩章へ輸卒は少し草臥れる　鶏牛子
(佳)「ホームイン」コーチに肩を叩かれ　柳堂
(佳)肩までの高さ弟口惜しがり　双光
(佳)亟常科文房具屋へ肩を組み　孤舟
(佳)逃げて來たつもりの肩を叩かれ　萬樂
(人)この頃の孫の力を肩に見る　双光
(地)假縫は肩へ懷しさうに倚り　水府
(天)叱られた證據に肩をすぼめて出　同
(軸)病上り風呂屋で知つた肩の幅　陽喜亭

席題　世間　水府選

爪の垢ほどを世間は種にする　鶏牛子

叔父さんに恐い世間を教へられ　孤舟
門標へ世間は別な噂なり　双光
廣い世間の三行欄に口がなし　東北
(人)番臺は世間の噂さ高う聞き　陽喜亭
(地)國の兄世間知らずに老けてゐる　斧葉
(天)十八になつて煩さい世間なり　孤舟
(軸)明けと共に世間へ放り出され　水府

席題　愔氣　双光選

愔氣させながら五十の坂を越え　孤舟
(佳)面富てのやうに愔氣は起きてゐる　萬樂
(人)綿入れが愔氣の膝に縫ひ上り　孤舟
(地)針仕事我慢が出來ぬ二時を聞き　陽喜亭
(天)夜の長さそれも愔氣の初めなり　水府
(軸)四疊半愔氣の後を泣いて居る　双光

兼題　怠け者　突支坊選

不景氣を尻目に見てる怠け者　白鵠
仕事着を汚さず歸へる怠け者　斧葉
自轉車を預けて畫の部へはいり　東北
書出しの高へ怠けた腕を組み　陽喜亭
(佳)今日も乂市場を拔ける怠け者　如月
(佳)要求の急先鋒は怠け者　月男
(佳)病氣せぬだけが取柄の怠け者　吉朗
(佳)怠け者親仁の膝へ遠く居る　宙外
(佳)怠け者今日も青空見て遊び　鶏牛子
(軸)測定の際だけつめる怠け者　突支坊

兼題　素面　水府選

留置場朝の素面に垢がつき　双光
素面ふと聞き捨てならぬ事を聞き　鶏牛子
素面ではれつから駄目の爭議團　虚白
まだ素面の内に相談纏められ　萬樂

飲めぬ者ばかり離れで何かたべ　如月
旦那今日素面で聘んだやゝこしさ　柳堂
機敷裏幹事は素面を恩に着せ　東北
氣の抜けた樣に素面が畏まり　吉朗
ちやぶ臺に素面ですまをの手を叩き　陽喜亭
重役は素面で來いと會ぬなり　孤舟
(佳)筋道が立つて素面の顏を立て　鷄牛子
(佳)猪口へ手を振つて餘興に出る女　萬樂
(佳)ふつつりと廢めたと素面なれ云へ　突支坊
(佳)逢狀の素面で行かれぬ口があり　東北
(佳)斷りて素面の友がして戻り　斧葉
(人)親切な素面に考へ直すなり　萬樂
(地)長火鉢素面へ義理のある話　宙外
(天)素面で來た叔父の座敷へ寄せ付けず　陽喜亭
(軸)あに弟子の癖は素面で嘘のやう　水府

かほる居偶會（大阪）

十一月四日　高橋　かほる報

減俸どころか職も無いなり　愚陀
減俸に間かづの事も考へる　愚陀
きれいに飲んで姐御惚ける　愚陀
ぶ男の子分を姐御供に連れ　かほる
涙人をしてそこの酒の味　愚陀
涙人へ國の方から月が出る　同
涙人の起きると雪が降つてゐる　かほる
涙人の氣げん河原へ下りて行き　同

尖鋭會句會（大阪）

十一月八日　夜於寺田町電停西入
内藤製作所　中野裸人報

兼題　陽　氣　二柳子　選

陽氣さを見せてる樣に女給塗り　素郎
ちと過ぎた陽氣を巡査持て餘し　裸人
陽氣になれと盃を持たすなり　柳影
(佳)たまに來て陽氣な話して歸り　子其
(佳)ウエトレス陽氣になれぬ事があ　柳影
(軸)仲居など要らの銚子持つて立ち　二柳子

席題　突　然　二柳子　選

突然な用事金入見當らず　子其
突然なその悲しみは大き過ぎ　柳影
突然に會ふて貸借恐れ入り　裸人
突然に梅田へ着いた電話なり　豆秋

席題　手　帳　子　其　選

警官の手帳一つで罪になり　鋭峯
女學生氣立ての樣な手帳持ち　斗入
持つだけの手帳の金ンは剝げてゐる　素郎
手帳のコンナ所に舞妓の名　豆秋
(佳)もう手帳戀を覺えた字が並び　柳影
(佳)儲かつた時代もあつた古手帳　裸人
(軸)警官の手帳酒屋の借も書き　子其

席題　金　庫　裸　人　選

日曜日金庫の上のカレンダー　子其
(佳)貨金のかたに金庫が流れ込み　斗入
(佳)缺損がつゞく金庫の一き過ぎ　素郎
(軸)丹前を着たが金庫の差圖する　裸人

席題　三　面　柳　影　選

三面を讀んでしまふた欠伸なり　素郎
(佳)人生の裏を三面見せて　裸人
(軸)三面に泣ける女で病んでゐる　柳影

席題　解散、ポスト、火鉢　互　選

解散といつて警部は固くなり　豆秋
檢束の殘り解散命ぜられ　斗入
抱いた兒にかゞんでポスト入れる　子其
ポストまで來てから葉書讀み直し　裸人
もう一度手を入れて見るポスト　二柳子
沈默にはさまれてゐる長火鉢　子其
火鉢だけ殘しお客は皆んな立ち　裸人
停電へ火鉢の火のあか〳〵と　同
差向ひ火鉢だん〳〵熱くなり　柳影

近江の哀愁（八幡）

十一月十六日　若井　たけし報

十一月十四日ひろし氏と共に歸幡、拙宅で二泊されたので對座句作しました。

戀秘める心にしとゞ落葉する　たけし
若き二人のほゝえみも春　ひろし
人前を語らずいろと疑はれ　たけし
母一人子一人庭の廣さかな　ひろし
友は歸り戀の灯がつく　たけし
なるやうになるさと肩をたゝきけり　ひろし

◇校正室から◇

これで本年最終號の校正を終つた。廿三日には杏三君が、廿四日には舟々君二柳子君が來てくれた。十一月號は雨町君に賴んで一日しかやらなかつた報いで、此號は全部やらされた。

各地柳壇もこの三倍位の紙面がないと收容出來なくなつた。句會もあまり多く題を出すより時間を多く與へ、句を練つて佳句を寄せられたいと思ふ。

誌上ではこれで本年のお別れです。何卒多幸な昭和五年をお迎へ下さい。新春特輯號は實的にも量的にも驚異的出現を期してなります。御期待下さい。

十一月二十五日（ひろし生）

編輯後記

▲これが本年の歳末號です。來るべき昭　五年は「川柳雜誌」にとつては七歳の春を迎えることになりますので、尤も意義ある雜誌たらんことを計劃して居ります　愛讀者諸氏に於かれましてもうんと力を入れて御後援御鞭韃下さるやう、歳末にあたり特にお願ひ申して置きます。

▲十一月號の月評は南地情緒の萬よし居でやつたが、本號の月評は川向ひの里十九居で七日の晩にやつた。こゝは富田屋や伊丹幸に近いだけに、隣に役者が經營してゐる玉突屋などがあつて、島之内情緒が漂ふたところである。評者は例によつて神戸の紋太君、八尾の山雨樓君、幸區のひろし君、此花區の琴人君と小生の五人で筆記は杏三、愚陀の兩君がやつて呉れた。

▲表紙は多忙中の吉田畵伯を煩はした。

▲「ビルディング」は相變らず人氣がいゝ。それで原稿が、ぼつ〳〵堆積して來た。ビルディング號でも出されば滿足して貰へぬ狀況だがビルディングそのものの性質から云つてさうする譯にも行かぬ。まあ、よりすぐれたビル原を書いて先客の尻をムズ〳〵させることだ。新年號からはビル取締法でもつと嚴選して行く覺悟である。

▲「飛燕往來」は本號は休載した

▲十日の午後一時から御旅支部の句會に臨んだ。この支部は毎月移動會場の形式をとつてゐたが、十一月の例會から市立東市民館で開くこととなつた。椅子テーブルの句會で何んだか役員會でも開いてゐるやうな感じがした。馴れたらこれもいゝかも知れぬ。

▲仁川支部の矢田冷刀君が重患で入院してゐるといふことを京城の橋本言也、横山巷頭子の兩氏からお知らせをうけて驚いてゐる。お互に暫く通信はしないがお互に忙しいので相變らず達者なんだらう位に思つてゐた際とて大變その後の經過を案じてゐる。何分遠隔の地なので直ぐさま見舞に飛んでゆくことも出來ぬのでとりあへず電報お見舞した次第です。特にお知らせ下さつた兩氏の御好意を謝すると共に、柳友諸兄にお知らせします。同君の一日も早く全快されることを私ども〳〵祈つて下さい。

▲桑港の伊藤神山人氏から柳友柏本瑾三氏が歸朝するので送別の句を送つて來られた。瑾三君は神山人氏と共に本誌の熱心な誌友ですが、日本滯在は四五ヶ月ださうです

▲東京すゞめ吟社の茶六氏が九日の午後神戸の紋太君の東道で來社されました。ひろし君も來合はせゐて、柳談に耽りました

十三日の夜同氏のために道頓堀の蠣船で社友同人その他の有志で歡迎句會を開きました。散會後來會者中の玉むしの諸君が主催で同氏の歡迎宴を深更まで續けました。これが散會は翌日の午後でした。が、それから又飲んで廻り、鳥山氏が加つてから更にうれしくなりお蔭で小生約三十時間ほど、ぶつ通しで飲みました。最もそのうち一時間半ほどは安眠しました。

▲前號の校正がはじまりかけたがひろし君が友人の家に不幸があつて鄉里へ歸つてゐたので二柳子君に賴んだところが、二柳子君の家庭でも令息の死産で喜悲こも〳〵の狀態、葭乃を二柳子居へやつて、僕は印刷所へ走る始末杏三君が店がひけると手傳ひに來てくれたので大して遲れずに出すことが出來たが二柳子夫人の健康については少なからず心配してゐたが不幸中の幸は夫人の肥立ちが非常に順調に運んだので本號の編輯日にはもう起きてみなの世話をやいてゐられる狀態です。

▲十一月は旅のおとづれを澤山頂いた。汀柳君が宮島から、東京から、雨迷君東京から、杏三君叡山から、路烏、飛左志、翠夢、圓角の諸君宮島から、二柳子、鶴峯の兩君牛瀧から、等々。

▲小生は今夜（二十二日）の船で松山へ行くことになつてゐる史上で有名な金善中納言宇喜多秀穗翁の壽像が松山城麓に建設されたので、廿四日の除幕式參列のために出かけるのであるが廿三日の夜支部主催で句會をやつてくれることになつてゐるらしいのでお馴染の柳友に澤山逢へると思ふと愉快である。

（路郎生）

投稿規定

▼近作柳樽及課題吟の句稿は葉書又は同型の厚紙に各題別紙に認め、住所氏名雅號を明記すること。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記のこと。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認めること

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他つき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第七卷第二號課題

十二月五日締切

（各題・句以内）

▼同僚　前田雀郎選

▼角帶　高橋かほる選

▼小商ひ　酒井駒人　川合舟々　共選

第七卷第三號課題

一月五日締切

（各題十句以内）

▼影　安井ひろし選

▼雀　太田朝陽選

▼家鴨　住田亂耽　朝田新水　共選

毎號募集

▼近作柳樽（拾句迄）麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號　一部　金參拾錢

新春特輯號　一部　金五拾錢

八月特輯號　一部　金四拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は番新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和四年十一月廿五日印刷

昭和四年十二月一日發行

第六卷第十二號（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社　振替口座大阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　サクラヤ書房。（明文堂　其他市内各書店）

（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（廣瀬）

石塚（石川縣小松）マコト屋（京都）三宅（松山）弘文舍

川柳雑誌社關係の人々

（いろは順）

賛助員

池澤樂居　大島濤明　西原柳雨
大道弘雄　岡田三面子　生田翠夢　桑原京郎
岡本一平　川上三太郎　池田雪峰　松村敏郎
片岡直方　六角桂風　増位山雨迷　伊藤絲之助
川村花菱　西村市公　岩本素人　淺井冷々子
吉岡鳥平　楊井二南　朝田新水　酒井駒人
田中香涯　柳川洲馬　北山悟郎
嘉納純　田中辰二　吉田清　平田柳一　近藤テルホ　岩崎柳路　伊藤愚陀　水谷鮎美
窪田銀波楼　土井文蝶　越田久水　安西杏三　長谷川一徹　原史風　萬よし
友淵貴山　阿形一杉　太田朝陽　小川三猿堂
田源坊　阿部閑生　川合舟々　橋本二柳子
若井たけし　亀井花童子　安井ひろし
前田雀郎　松丘町二
長崎柳秀　松盛琴人
國枝史郎　竹内多聞　出口雨町
藤村作　麻生葭乃
小出榴重　中島鐵洲
藤本卯之助　木村半文錢　谷村稔　左馬　牧田普門　高見柳骨　高橋かほる　住田亂耿
赤井清司　篠原春雨　柴谷柴舟　辻谷　永田里十九　水田桐郎　中川めかく子　中野柳陽　嶋田翠峯　三輪五輪　矢田冷刀　藤里好古主
末弘嚴太郎　蛭子省二　森東魚　相元紋太　中見光路　中澤濁水　清水光風　白井梅里　越村加香

客員

伊藤彦造

社友

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山悟郎
濱寺支部（大阪府）幹事太田朝陽
神戸支部（神戸市）幹事楊井二南
山口支部（山口縣）幹事柳川洲馬
函館支部（函館市）幹事龜井花童子
仁川支部（朝鮮）幹事矢田冷刀
小松支部（石川縣）幹事本田柳一路
高知支部（高知市）幹事中澤濁水
梅田支部（大阪市）幹事水谷鮎美
螢ヶ池支部（大阪府）幹事牧田普門
金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子
糸屋町支部（大阪市）幹事川合舟々
田邊支部（和歌山）幹事辻左馬
籔川支部（島根縣）幹事伊藤絲之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田桐郎
京都支部（京都市）幹事桑原京郎
富岡支部（山口縣）幹事兼重白鷗
鳥取支部（鳥取市）幹事中島鐵洲
北濱支部（大阪市）幹事谷村稔
別府支部（別府市）幹事小川三猿堂
堺支部（堺市）幹事友淵貴山
松山支部（松山市）幹事岩本素人
守口支部（大阪府）幹事朝田新水
御旅支部（大阪市）幹事櫻井圓角
高岡支部（富山縣）幹事越田久水

編輯局（同人）

石川双葉子
橋本二柳子

年賀用葉書臺紙特價表

畫仙紙	四方金	五十枚	四十錢	百枚 七十五錢
一番唐紙	同	同	四十錢	同 七十五錢
二番唐紙	同	同	四十錢	同 七十五錢
五色奉書	同	同	四十錢	同 七十五錢
朱唐紙	同	同	七十錢	同 一圓卅錢
鳥ノ子耳附五色		同	八十錢	同 一圓五十錢
内地送費	前金ニ限リ	同	六錢	二百枚迄 十二錢

大阪市東區安土町堺筋西

書畫用品 風流雅品 **商和正堂**

電話本町一〇四六番
振替大阪九一七五番

社名改稱と事務所移轉

謹啓 高堂愈々御清祥賀し上げます。

毎々御愛顧を蒙つて居りました「廣告賣文社」は今般業務範圍を一層擴張して、一切の文章に關する創作代作並びに圖案製作に從事致すことゝなりました。就きましてはこれを一轉機として社名を改稱致し同時に事務所を左記に移すことになりました。今後とも倍舊御引立の程伏してお願ひ申上げます。敬具

昭和四年十一月

大阪市西成區千本通五丁目七番地

大阪文案社

振替大阪二〇三九二番

社主 麻生路郎（幸二郎）

◆營業科目◆ 廣告立案文案圖按其他一切の文章の創作代作及び機關新聞雜誌の編輯、傳記編纂、印刷校正の引受等

古本屋時代

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に

公立社の棚

には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。

（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南五六二番

清酒

午後六時 白鶴が待ち 妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて來る

攝津灘

嘉納合名會社釀

麻生路郎氏著・

川柳漫談

吉岡鳥平氏挿繪
柴谷柴舟氏挿繪

四六版・三九一頁
美裝函入・挿繪六十葉

定價金壹圓五拾錢
送料金拾貳錢

本書の内容 ▼川柳漫談（臍の緒、盲人の徽章、蛙、夫婦喧嘩の解剖、都會地獄、君も僕も死ぬ話、レディーメードの書置、戀を追ふ一人者、指切、鼠、盜人、女の三十、賽錢、重役、フアブルの糞の外交、幽靈の靴、近眼の微苦笑、傘の行衛、猫の寫眞、愛の巢、保險屋と新聞屋、贅趣味、床下の佛像、無口附貸の犬、鼻の修業、なりさがり魂、校長さんと煙草、私の墓）▼川柳染ちがひ▼一ト昔前の大阪見物

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入 定價一圓（送料拾錢）

内容概目

川柳漫畫 累卵の遊び
日月は輝く
大衆と共に

著者のサイン御希望の方はその旨附記して御注文ありたし

大正十二年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和四年十一月廿五日印刷納本 昭和四年十二月一日發行

川柳雜誌（第七十一號） 定價三拾錢

賣捌所 不朽洞
大阪市西成區千本通五の七
振替大阪五二五八五番